九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

古墳時代初頭前後の筑前地方

田崎，博之

https://doi.org/10.15017/2230720

出版情報：史淵. 120, pp.219-261, 1983-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

古墳時代初頭前後の筑前地方

田崎博之

はじめに
一　古墳時代初頭前後の土器編年について
二　外来系統土器の流入過程
三　古墳時代初頭前後の筑前地方

はじめに

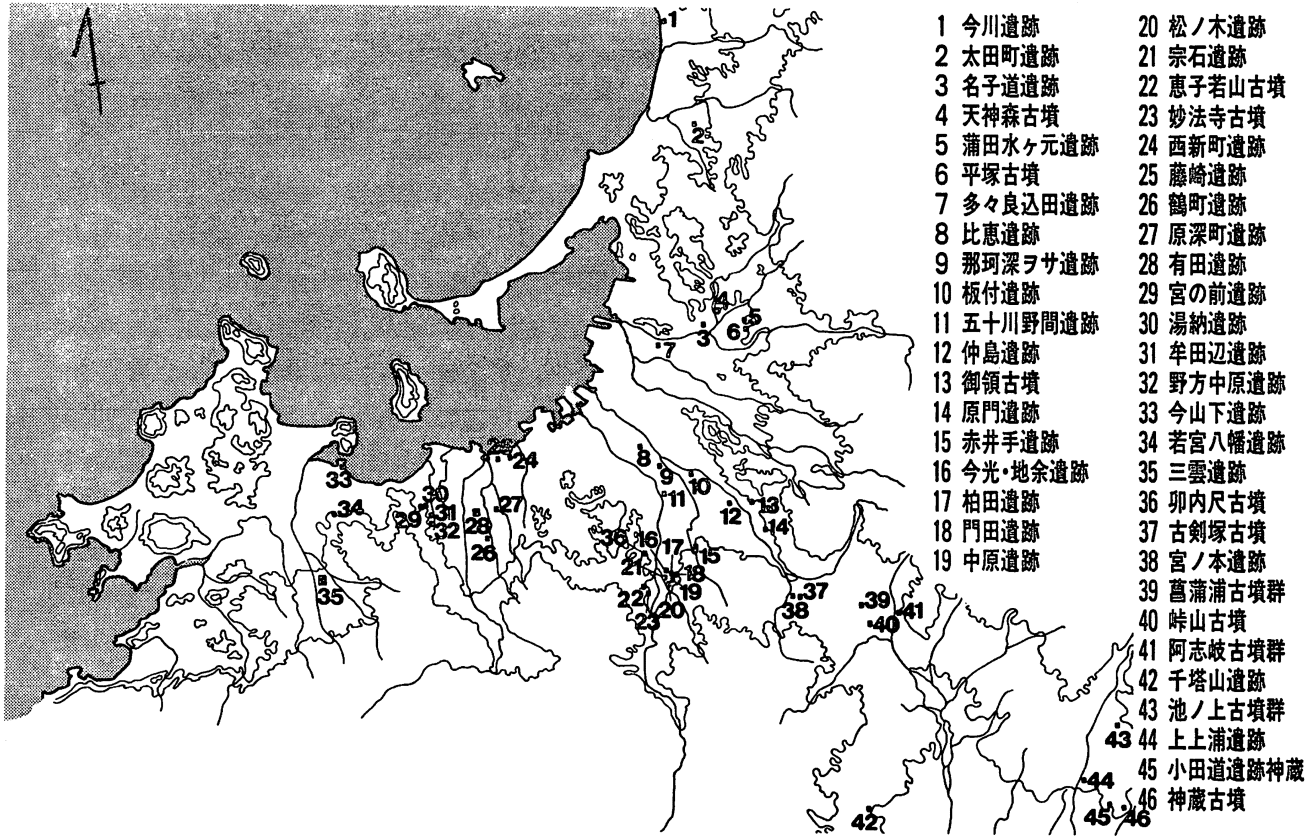
現在、古墳時代と弥生時代とを区分する見解は、土器様式が「一つの統一体に帰着する時」をもって設定するという土器を標識として区分する見解と、[1]「統一的な首長霊祭祀型式の創出」と意義付けられる定型化した前方後円墳の出現をもって設定するという墳墓を標識として区分する見解[2]に大別される。しかし、土器様式の統一体への帰着が定型化した前方後円墳の出現と時間的な整合性をもつのか、どのような内的関連性をもつのかという問題は、充分に論証されているとは言い難い。[3]また、土器様式の「統一体に帰着」することの実体はそれほど明らかではなく、近年の発掘調査によって得られた土器資料は、それがより複雑な問題であることを示している。本稿では、筑前地方の古墳時代初頭前後の外来系統土器の流入過程をトレースすることによって、土器の面から設定される古墳時代開始の画期

を荒削りであるが予察したく考える。

一　古墳時代初頭前後の土器編年について

筑前地方における古墳時代初頭前後の土器の編年的研究は、一九六七・六八年の有田遺跡の調査[4]以来、宮の前遺跡[5]・湯納遺跡[6]などの早良平野の資料を中心として本格的に開始された。その後、柏田遺跡[7]、門田遺跡[8]、今光遺跡・地余遺跡[9]などの福岡平野の資料を中心とした土器編年がくみたてられ、現在では甘木・朝倉地区の上上浦遺跡[10]、小田道遺跡[11]、糸島平野の三雲遺跡[12]など各地で良好な資料が得られている。該期の土器編年案は、小田富士雄・下條信行・井上裕弘・武末純一・佐々木隆彦・柳田康雄・常松幹雄氏などにより発表されており、その型式変化に関しては大要はほぼ同様な見解が得られていると言える。[13]しかし、様式の設定の問題となると、方法論的立場の違いから型式の組み合せ・位置付けに大きな相違がみられる。また、該期の土器を在地系統土器と外来系統土器に分ける考え方もだされてはいるが、その系譜関係が充分に整理されているとは言い難い。そのため、本稿の目的とする外来系統土器の流入過程を検討する前に、筆者なりの土器編年を整理する必要性を感じる。本節では、古墳時代初頭前後の良好な土器資料が得られている糸島郡三雲遺跡・福岡市西新町遺跡[14]・甘木市小田道遺跡出土土器を中心として、器種によっては他の遺跡の良好な資料を補って、筆者の土器編年観を提示しておく。[15]

まず、古墳時代初頭前後の土器は、大きく在地系統土器[16]と外来系統土器とに分けられる。外来系統土器は、形状・調整手法から、近畿地方に分布する土器と酷似する近畿地方系統土器、山陰地方から広島県にわたって分布する土器と酷似する中国中部地方系統土器、岡山県々南部地方に分布する土器と酷似する山陽東部地方系統土器、朝鮮半島から招来された陶質土器、さらに前述の各系統の土器（特に近畿地方系統土器）と在地系統土器とが折衷された土器などに細分できる。



第1図　筑前地方における古墳時代初頭前後の主要遺跡分布図（縮尺1/40000）

次に、該期の土器の中で、最も出土量が多く、弥生時代後期から系譜関係を把握しやすく、編年の基準となるものとして、在地系統の甕形土器があげられる。これらは形状・調整手法から六つの型式に分類できる（以下第二～四図参照）。

第Ⅰ型式（第二図1～4）――「く」字形口縁部をもち、胴部は器高とくらべ長めで胴部最大径が胴部中位にあり、凸レンズ状底がやや退化した底部がつく。調整は第Ⅳ型式まで基本的には同じで、胴部外面は上半をタタキ調整後にハケメ調整を施し、下半はケズリ調整[17]を施した後に時として軽くナデ仕上げする。内面はハケメ調整またはナデ調整を施す。

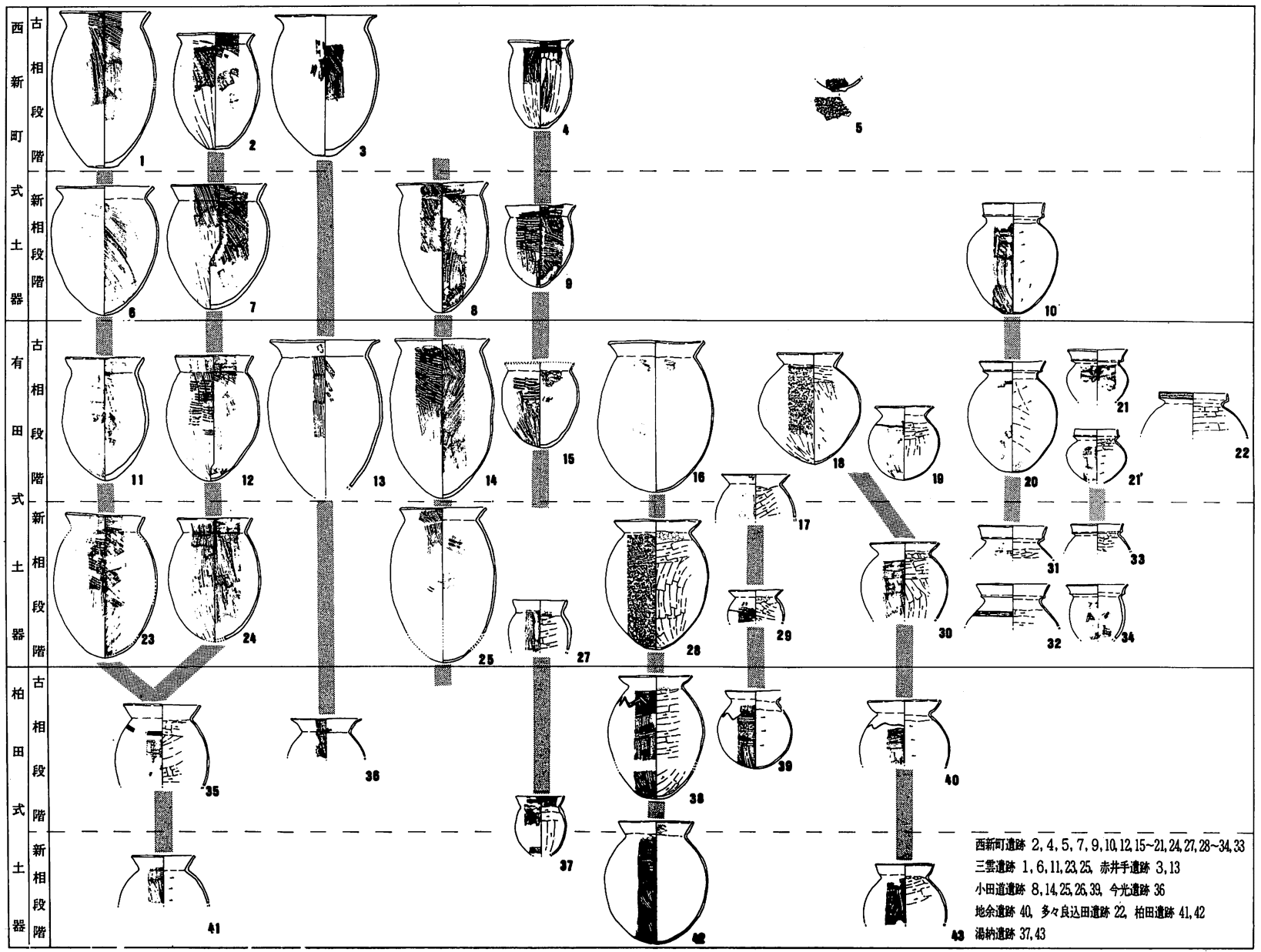
第Ⅱ型式（第二図6～9）――「く」字形口縁部で、胴部は載頭倒卵形の胴部である。凸レンズ状底が痕跡的に残る底部をもつものと、丸底のものとがある。底部の形状では前者は第Ⅰ型式と後者の中間的なもので、底部を基準として二つの型式に分離可能であるが、口縁部・胴部形状には対応する変差は認められず、一型式内の部分要素の差違と考える。

第Ⅲ型式（第二図11～15）――第Ⅱ型式と比較して胴部最大径部は胴部の中位にあり、底部は丸底で、全体としてラグビーボールに近い形状を呈する。

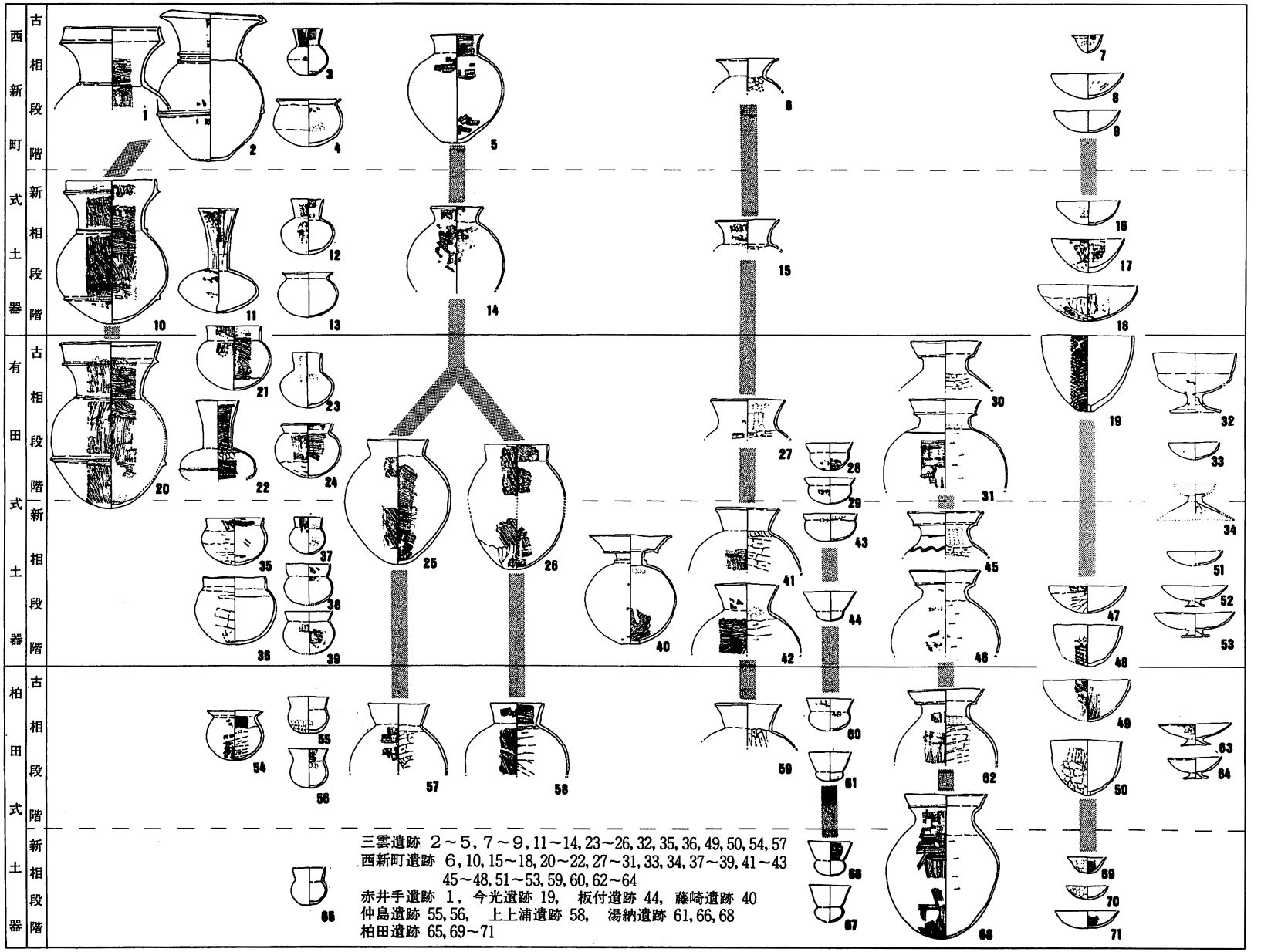
第Ⅳ型式（第二図23～27）――胴部最大径部は胴部中位にあり、胴部上半はすぼまり、底部は第Ⅱ・Ⅲ型式がやや尖りぎみであるのに対して丸みをおび、全体として楕円形に近い胴部をもつ。小形品の一部には胴部内面にヘラケズリを施すものがある。

第Ⅴ型式（第二図35・36）――第Ⅳ型式と比較して器体はより丸みをおびる。板付遺跡第一区の古墳時代住居跡出土のもの[18]が典型例である。第Ⅳ型式も含め、小形品・大形品ともに胴部内面へラケズリ手法が採用される。

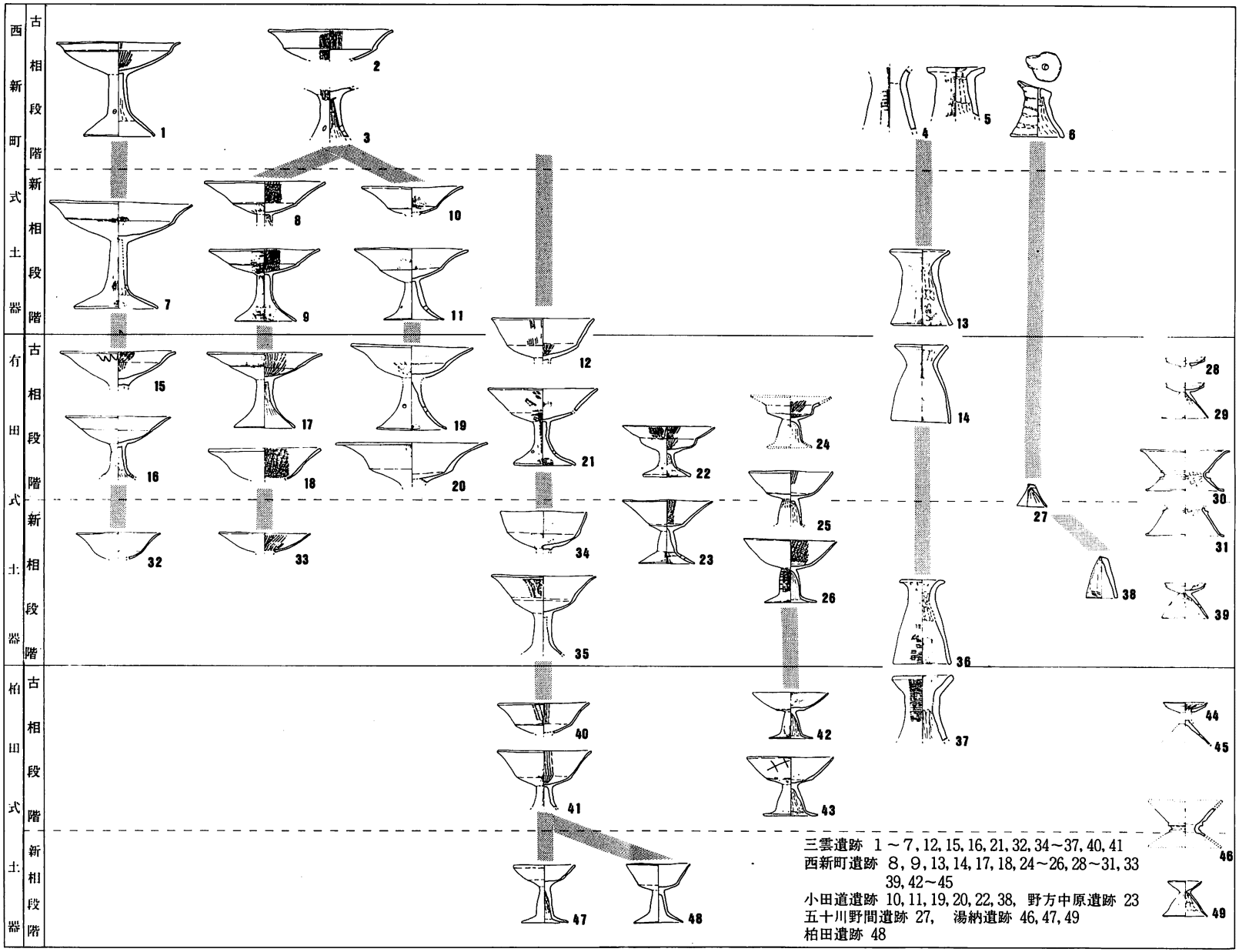
第Ⅵ型式（第二図41）――第Ⅴ型式と比較して、胴部上半がすぼまり、「く」字口縁部がたちあがる。



第２図　筑前地方における古墳時代初頭前後の土器編年図①（縮尺1/12）



第3図　筑前地方における古墳時代初頭前後の土器編年図②（縮尺1/12）



第4図 筑前地方における古墳時代初頭前後の土器編年図⑧（縮尺1/12）

遺構＼在地系統の甕形土器の型式分類	第Ⅰ型式	第Ⅱ型式	第Ⅲ型式	第Ⅳ型式	第Ⅴ型式	第Ⅵ型式
三雲遺跡サキゾノⅠ-1区2号住居跡	○					
〃 番上Ⅱ-6区1号住居跡	○					
〃 仲田Ⅰ-16区17号住居跡	○					
西新町遺跡H地区2号住居跡	○	○				
〃 H地区3号住居跡	○	○				
小田道遺跡46号住居跡	○	○				
三雲遺跡番上Ⅱ-6区7号住居跡		○				
〃 仲田Ⅰ-16区18号住居跡		○	○			
西新町遺跡D地区3号住居跡		○	○			
小田道遺跡1号住居跡		○	○			
三雲遺跡番上Ⅱ-6区6号住居跡			○			
西新町遺跡A地区6号住居跡			○			
小田道遺跡28号住居跡			○			
有田遺跡31街区2号住居跡			○	○		
三雲遺跡塚廻Ⅱ-6区1号住居跡			○	○		
小田道遺跡49号住居跡			○	○		
三雲遺跡仲田Ⅰ-16区3号住居跡			○	○		
上上浦遺跡15号住居跡				○		
西新町遺跡D地区6号住居跡				○		
〃 D地区16号住居跡				○	○	
板付遺跡第Ⅰ区住居跡				○	○	
三雲遺跡サキゾノⅠ-4・5区2号住居跡				○	○	
湯納遺跡D-5溝出土土師器				○	○	○

第1表　在地系統の甕形土器の第Ⅰ～Ⅵ型式の主要遺構での伴出関係

これらの在地系統の甕形土器の各型式が、一括あるいは短時間に埋没したと考える主要な遺構で、どのような伴出関係をもつかを示したのが第一表である。これに加え、第Ⅰ型式が三雲遺跡サキゾノⅠ-Ⅵ1区2号住居跡で弥生時代後期中頃に比定される土器群と伴出したことから、第Ⅰ型式→第Ⅱ型式→第Ⅲ型式→第Ⅳ型式→第Ⅴ型式（古→新を示す）の変遷が考えられる。また、湯納遺跡D－5溝、柏田遺跡七号住居跡で第Ⅳ・Ⅴ型式に混って第Ⅵ型式が出土していることから、第Ⅴ型式→第Ⅵ型式の変遷が考えられる。このように第Ⅰ型式が弥生時代後期中頃の土器群と伴うこと、第Ⅵ型式が古墳時代の布留式土器と伴うことから、各型式は一定の時間幅をもって存在し変遷していったと考える。さらに、外来系統の甕形土器、壷形土器、高坏形土器なども、各々前述した在地系統の甕形土器の各型式と時間的に対応する型式が設定でき、在地系統の甕形土器を基準とする六つの土器群（型式群）を考えることができる。これらは形式の消長・調整手法の変化などから、大きく三つの「様式」にまとめられる。本稿では、在地系統の甕形土器の第Ⅰ・Ⅱ型式を基準とする土器群（型式群）を「西新町式土器」、同じ

く第Ⅲ・Ⅳ型式を基準とする土器群（型式群）を「有田式土器」、同じく第Ⅴ・Ⅵ型式を基準とする土器群（型式群）を「柏田式土器」と呼ぶ。各様式の古新の土器群（型式群）は、各々〇〇式土器古相段階あるいは新相段階と呼ぶこととする。

研究史をふりかえるならば、まず「有田式土器」には有田遺跡の報告で小田富士雄氏が設定した三十一街区溝直上出土土器を指標とする「有田Ⅰ期」、十七街区住居跡出土土器を指標とする「有田Ⅱ期」の両者が対応する。[19] 次に、森貞次郎氏が提唱した「西新期」の土器は本稿の第Ⅱ型式と第Ⅲ型式の甕形土器で、形状・胎土・焼成が「古墳出土の土師器より弥生式土器に近いというだけの理由で、過渡期的なものとして、一応弥生式土器」とされたものである。[20] 本稿では、弥生時代後期中頃に比定される土器群と前述の「有田式土器」の間に位置付けられる在地系統の甕形土器の第Ⅰ・Ⅱ型式を基準とする土器群（型式群）に「西新町式土器」の名称を与えた。[21] その他最近の該期の土器編年案との対応関係は、「西新町式土器」は常松氏の西新町Ⅰ～Ⅱ式土器に、「有田式土器」は井上氏の土師器Ⅰ期と同Ⅱ期の一部・武末氏の宮の前期・柳田氏の土師器Ⅰ式・常松氏の西新町Ⅲ式土器に、「柏田式土器」は井上氏の土師器Ⅱ期の一部と同Ⅲ期・武末氏の有田Ⅰ期にほぼ対応する。[22]

古墳時代初頭前後の土器様式として、西新町式土器・有田式土器・柏田式土器を設定したが、以下に各様式ごとに内容を略述する。また、器種の呼称は煩雑さをさけるために、特殊な器種を除き、「甕形土器」といった呼称の「形土器」を省略して、「甕」・「壷」・「高坏」などとする。

〈西新町式土器〉

弥生時代後期中頃に比定される土器群に直続し、在地系統土器はほとんどの器種で凸レンズ状底から丸底への変化がみられる段階で、外来系統土器の出土は極めて稀である。

（古相段階）在地系統土器には甕・壺・鉢・高坏・器台・支脚がある。壺には球形の胴部をもつ複合口縁壺（第三図1・2）、球形の胴部をもつ小形の短頸壺（第三図3）、長頸壺、偏球形の胴部に短く「く」字形に外反する口縁部をもつ無頸壺（第三図4）、頸部がほぼ直立して口縁部付近でゆるやかに外湾する中形壺（第三図5）、複合口縁壺の複合口縁部をとりさった形の口頸部が朝顔形に大きくひらく広口壺などがある。多くは凸レンズ状底がやや退化した底部をもつ。複合口縁壺の一部（第三図2）には、口縁部に古い要素を残すものがある。鉢には「く」字形口縁部をもつもの（第三図7）と、直口縁部をもつもの（第三図8・9）とがあり、内外面をハケメ調整した後にナデ仕上げしたものが多い。高坏は坏部中位で一旦反転してのびるもので、後期中頃に比定される板付遺跡F・5c区三号井戸跡出土例[23]とくらべ坏部上半が傾斜してくる。坏部上半ののびが比較的短いもの（第四図1）と長いもの（第四図2）とがある。この段階には沓形支脚（第四図6）がすでに出現している。

外来系統土器には、甕もしくは壺の底部破片（第二図5）と、口頸部が強く外反する広口壺（第三図6）とがあり、両者ともに近畿地方系統土器と考える。前者は外面に螺旋状のタタキ痕を残し、内面をハケメ状工具で押さえつけながら回転させて調整する。近畿地方の後期第Ⅴ様式でも新しいものと対応するものであろうか。後者は胴部内面にヘラケズリ状の調整痕を残し、他はナデあるいは横ナデ調整を施す。

（新相段階）　在地系統のものは古相段階と同じ器種構成をなす。壺は甕より一段階早く丸底化してしまう。複合口縁壺には口縁部がほぼ直立するもの（第三図10）や、春日市赤井手遺跡井戸跡の例のように口縁部先端を外折させるもの[24]がある。長頸壺はソロバン玉形の胴部にゆるやかに外反しながらのびる口頸部がつく（第三図11）。小形の短頸壺は丸底で球形の胴部にほぼ直立する口頸部がつく（第三図12）。「く」字形口縁部をもつ無頸壺は胴部上半がすぼまり、偏球形の胴部・丸底となる（第三図13）。前段階の第三図5の系譜をひく中形壺は口頸部がゆるやかに外反するようになり、球形の胴部に丸底がつくものと考える（第三図14）。壺の一部には胴部外面下半をケズリ調整する

ものがみられる。鉢にも甕・壷と同様に底部付近をケズリ調整するものが中・大形品にみられる（第三図16～18）。高坏は前段階とくらべ、坏部上半の傾斜がきつくなり、中位の反転部の段は未だ明瞭である。前段階と同様に、坏部上半ののびが短めのもの（第四図7）、長めのもの（第四図8～11）、脚部が後期中頃のものにみられるような古い形状を呈するもの（第四図11）、坏部上半が後期中頃のものと同じくたちあがり身の深いもの（第四図12）などがある。その他、器台・支脚は前段階のものとは判別しがたい。この段階もしくは有田式土器古相段階には鉢形で底部に一孔を穿孔する甑があらわれる（第三図19）。

外来系統土器には、近畿地方系統の広口壷と中国中部地方系統の二重口縁甕が出土しているにすぎない。前者は頸部が胴部にほぼ直立して口縁部付近で大きく外反する。胴部内面はヘラケズリ、他はハケメ調整後ナデもしくは横ナデで仕上げる（第三図15）。後者はほぼ直立する二重口縁部をもち、頸部が「コ」字形に屈折して短い円筒状を呈し、やや肩のはる胴部に凸レンズ状底がつく（第二図10）。底部形状からいうと本来は在地系統土器との折衷形とすべきものであるが、本稿では一応中国中部地方系統土器の中で考えておく。口縁部付近の形状は島根県福市Y－53の例に近く、藤田憲司氏の山陰地方Ⅳ期、青木遺跡編年のⅤ・Ⅵ期の土器群と時間的に併行するものと考える。[25]

〈有田式土器〉

在地系統土器は西新町式土器の伝統をそのままひきつぐが、外来系統土器－特に近畿地方系統土器と中国中部地方系統土器－が甕・壷・鉢・高坏・器台と器種的にも量的にも揃う。外来系統土器と在地系統土器の折衷形の甕・高坏がみられる。

（古相段階）　在地系統土器の器種は前段階とほとんどかわらない。壷はすべてが丸底である。複合口縁壷は口縁部が外傾し、ゆるやかに外反する頸部に球形の胴部がつく（第三図20）。長頸壷は胴部最大径部が中位より下方にさ

がり安定感にとむ形状を呈する（第三図22）。「く」字口縁部をもつ無頸壷は前段階とくらべ口縁部がたちあがり、胴部最大径部が胴部中位より上方にうつる（第三図24）。これと同様な胴部に直立する短い口頸部をもつ中・大形の短頸壷がある（第三図21）。西新町式土器の第三図5・14と系譜のたどれる壷には口頸部が若干外湾しながらのびるもの（第三図25）と、口頸部が直立するもの（第三図26）とがあるが、有田式土器の古相段階と新相段階に分離できなかった。鉢はいずれも丸底で、直口縁部をもつものと「く」字形口縁部をもつものとがある。高坏には坏部中位の段が不明瞭となり、上半部の反転がほとんど目立たなくなるものが多い（第四図15～17）。出土量は少ないが、坏部上半の反転が強調されて身の深いものもある（第四図19・20）。他に器台・支脚・甑がある（第四図13・14・27）。

近幾地方系統土器は甕・壷・鉢・高坏・器台がある。甕は口縁部が「く」字形に屈折し、口縁端部をつまみ上げるもの（第二図18）と丸みをもつ低い隆起をつくるもの（第二図19）とがある。また、胴部外面上半に細かいタタキ痕を残すものと、タタキ調整を施した後にハケメ調整を施すものとに分けられる。壷には二重口縁壷・広口壷とがあるが、前者は筑前地方では好例にめぐまれず、参考例として佐賀県鳥栖市本川原遺跡一号方形周溝墓出土例をあげておく。[26] 後者はゆるやかに外湾しながらのびる口頸部をもち、前段階のものと比して口頸部が長い（第三図27）。鉢には直口縁部をもつもの（第三図33）と、「く」字形口縁部をもつもの（第三図28・29・43）がある。高坏には坏部が二段の屈曲をもつもの（第四図24）と、短い坏部下半にややふくらみをもつ上半部がつくもの（第四図25・26）とがあり、脚部は両者ともにややふくらみをもち裾付近で屈曲してひろがる。鉢と高坏については、古相段階と新相段階に分離できなかった。器台は「ハ」字形にひろがる脚部をもち、口径は受け部付け根の径にほぼ等しい（第四図28・29）。鉢・高坏・器台は、後述する新相段階のものも含め、内外面をミガキ調整し胎土にほとんど砂粒を含まない精製品が多い。公表された資料でいえば、これらの土器群は奈良県和田廃寺下層の溝出土の土器群、纒向3式土器に近似しており、それらとの時間的な併行関係を考える。[27]

中国中部地方系統土器には甕・壺・高坏・器台がある。甕には大形品（第二図20）と小形品（第二図21・21′）の二者があり、若干外傾する二重口縁部がナデ肩の胴部につき、頸部は前段階ほど明確な筒状を呈さない。小形品の21と21′は形状面から同一の系譜のものとは考え難く、本来は中国中部地方の二つの異なった系統の土器とすべきものだろうか。壺は二重口縁部をもち、円筒形の頸部が直立ぎみにたちあがる。ナデ肩の長胴のもの（第三図30）と球形に近い胴部のもの（第三図31）とがある。器台は所謂「鼓形器台」で、古相段階のものと新相段階のものとに明確に分離できなかった。高坏の出土は極めて稀であり、西新町遺跡D地区八号住居跡出土の一例のみしか実見できなかった。これらの土器群は藤田憲司氏の山陰Ⅳ期土器群と時間的に併行するものと考える。[28]

この段階でみられる外来系統土器と在地系統土器の折衷形の土器は、近畿地方系統土器との折衷形のものがほとんどで、出土量は少ない。甕には大形品と小形品とがある。前者は近畿地方系統の甕の口縁端部をつまみ上げる手法を踏襲するが、ハケメおよびナデ調整で仕上げる手法・器体の大きさは在地系統の甕と共通する（第二図16）。後者は「く」字形口縁部の屈折度、胴部内面のヘラケズリ手法の採用、器体の大きさは近畿地方系統の甕と類似するが、器壁は厚めでヘラケズリにより器壁を極限まで薄くするという意識はなく、口縁端部をつまみ上げたり隆起させない（第二図17）。第四図22の高坏は脚部が近畿地方系統のものに近いが、坏部形状は異なっており、一応折衷形の土器としておく。

（新相段階）　在地系統の壺には球形の胴部に短い口頸部がつく小形の短頸壺（第三図37）、扁球形の胴部にやや内湾してのびる「く」字形口縁部をもつ精製の小形壺（第三図38・39）などがあるが、複合口縁壺、口頸部が朝顔形に大きくひらく広口壺などは姿を消す。高坏は坏部が小さくなり、坏部中位の段はほとんど目立たない（第四図32～35）。その他に鉢・器台・支脚があるが、支脚の一部には小形の精製品がみられる（第四図27・38）。

近畿地方系統土器は前段階と同様な器種構成をとる。甕はゆるやかに屈曲する「く」字形口縁部が直線的にのびて

先端をわずかに隆起させる。胴部内面のヘラケズリは前段階のものの多くが口縁部の付け根まで施すのに対して、肩部付近までしか施さない（第二図30）。壷には二重口縁壷・広口壷・長頸壷・小形丸底壷がある。二重口縁壷は球形の胴部に直立する頸部をもつ（第三図40）。広口壷は口頸部が直線的にのび、一部に口縁部をわずかに隆起させるものもみられる（第三図41・42）・小形丸底壷は胴部はほとんどふくらみをもたない（第三図44）。器台は前段階とくらべて受け部が外傾してくる（第三図44）。これらの土器群は奈良県坂田寺下層出土の土器群に最も近く、時間的にも併行関係をもつと考える。[29]

中国中部地方系統土器の甕には大形品（第二図31・32）と小形品（第二図33・34）とがあり、いずれも二重口縁部をもち頸部はゆるやかに屈曲して球形の胴部がつき、胴部内面のヘラケズリ調整は肩部付近までしか施されない。壷は二重口縁部をもちナデ肩の胴部がつき、頸部は前段階のように筒形を呈さない（第三図45・46）。一部の甕・壷に口縁端部をわずかに隆起させるものがみられるが、この手法は本来中国中部地方系統のものではなく、近畿地方系統の甕・広口壷の手法をとりいれたものと考える。鉢は直口縁部をもつ脚台付のもので、脚台裾部が屈曲しながらわずかに肥厚する（第三図52・53）。これらの土器群は前段階と同様に、藤田憲司氏の山陰Ⅳ期の土器群と併行するものと考える。[30]

折衷形の土器には甕があるが、いずれも近畿地方系統土器との折衷形の甕である。大形品と小形品があり、前者は直線的にのびる「く」字形口縁部をもち、先端部をわずかに隆起させる。この段階から大形品にも内面ヘラケズリ技法を採用されるが、近畿地方系統の甕と同様に肩部付近までしか施されない（第二図28）。後者は形状的には近畿地方系統の甕に近いが、口縁端部を隆起させず、胴部内面ヘラケズリは雑であり、焼きも在地系統の甕に近い（第二図29）。

このほか、福岡市多々良込田遺跡六号住居跡から山陽東部地方系統の甕が出土している（第二図22）。[31]

〈柏田式土器〉

柏田式土器の大きな画期は、在地系統の甕と壺に胴部内面ヘラケズリ技法が本格的に採用されることと、近畿地方系統土器と在地系統土器との折衷形の土器が盛行することである。

（古相段階）　在地系統の壺には偏球形もしくは球形の胴部に直線的にのびる短い口頸部がつく小形壺（第三図55・56）、前段階の第三図25の系譜をひく壺で前段階とくらべ口頸部が長く直線的にのびるもの（第三図57）、同じく第三図26の系譜をひき球形の胴部に直線的にのびる短めの口頸部がつくもの（第三図58）などがある。後二者の壺には胴部内面をヘラケズリする手法が採用される。高坏は前段階のものより坏部上半がたちあがり、口径が一まわり小さくなり、脚部が短くなる（第四40・41）。その他には鉢・器台・甑などがある。

近畿地方系統土器には甕・壺・鉢・器台・高坏がある。甕は球形の胴部をもち、口縁部はわずかに内湾しながらのびて先端部をわずかに隆起させる（第二図40）。壺には二重口縁壺・長頸壺・広口壺・小形丸底壺がある。二重口縁壺は頸部が外傾し、二重口縁部の箍部が退化して段状となる。広口壺は口頸部が胴部から直角に屈折してのびる（第三図59）。小形丸底壺には「く」字形口縁部をもった精製の小形鉢から発達したと考える口頸部の短いもの（第三図60）と、前段階に出現した小形丸底壺の系譜をひき口頸部がラッパ形にひらくもの（第三図61）とがある。両者ともに前段階とくらべ胴部がふくらみをもち若干肩がはる。長頸壺は大野城市仲島遺跡㊻6区SD－02溝出土のものが好例で、前段階とくらべ胴部が丸みをおびる。[32] 高坏は坏部の屈曲部が下方にあり、上半部がわずかに外湾しながらのびて、脚部が「ハ」字形にのび裾部付近で屈折する（第三図42・43）。器台は前段階とくらべ受け部がさらに外傾し、脚部のひらきが大きく脚裾部径が口径をうわまわる。これらの土器群と後述の新相段階のものは、奈良県上ノ井手遺跡の溝SD－031出土土器群に最も近く、時間的な併行関係をもつと考える。[33]

中国中部地方系統土器の壺は二重口縁部をもち、ナデ肩の胴部と頸部の境いが明瞭でなく、頸部はゆるやかに内湾

しながらのびる（第三図62）。鉢は脚台をもち、脚台部はゆるやかに屈曲しながらひろがる（第三図63・64）。これらの土器群と後述の新相段階のものは藤田憲司氏の山陰Ⅴ期あるいは小谷式土器と呼ばれる土器群と最も類以しており、それらと時間的に併行関係をもつものと考える。(34)

その他、近畿地方系統土器と在地系統土器との折衷形の土器には甕・壷・高坏などがある（第二図38・39）。

（新相段階）　資料的な面から各系統・器種を充分に把握できなかった。在地系統の壷は球形の胴部に短い口頸部がつくもの（第三図65）以外、明らかにこの段階のものと判断できるものは少ない。高坏は近畿地方系統のものとあわせてバラエティに富み、充分に系譜関係をおさえがたい。基本的には、ふくらみをもつ脚部が裾部付近で大きく屈折するが、屈折の度合から第四図47と48の二者に分けられる。坏部は屈曲部が下方にあるが、上半部が外湾しながらのびるものとやや内湾ぎみにのびるものとがある。他に直口縁の鉢・器台がある。

近畿地方系統土器としては甕・小形丸底壷・器台が分離できた。甕は前段階より胴部が球形化し、口縁部はたちあがり先端部の隆起は内方に丸くはりだすようになる（第二図42）。小形丸底壷は胴部がふくらみをもち偏球形を呈し、口頸部はラッパ形に大きくひろがる（第三図66・67）。器台は受け部が小さくなり、一部には受け部々分が省略されたものもみられる（第四図49）。

中国中部地方系統土器には壷・鉢・器台がある。壷はナデ肩の胴部にゆるやかなカーブをえがく頸部がつき、二重口縁部の先端が内方へわずかに隆起する（第二図68）。

折衷形の土器は近畿地方系統土器と在地系統土器との折衷形のもので甕が多い。甕は口縁部がたちあがり、胴部上半がすぼまり球形化がすすむ（第二図42）。

以上、古墳時代初頭前後の土器編年をのべたが、近年の資料の充実により、筑前地方内の糸島平野・福岡平野とい

う小平野単位でも在地系統土器の地域色を大まかに指摘できるようになってきており、これについて簡単にふれておきたい。まず、高坏は坏部が中位で一旦反転してのびる形状を基本とするが、時間的に坏部中位の反転部の段が退化し、上半部がひらいていく傾向が認められる。しかし、西新町遺跡・藤崎遺跡・原深町遺跡などの早良平野の高坏は坏部上半が長めで、坏部内面にハケメ調整の後に暗文を描き装飾性に富んだものである（第四図8・9・17・18・33）[35]。野方中原遺跡六号石棺墓供献の高坏・同F―4区2―a地点出土の高坏も同様で、中国中部地方系統の鼓形器台にも同じ調整手法が認められる[36]。三雲遺跡などの糸島平野の高坏は早良平野のものとくらべ坏部上半が短かめで、坏部内面は丁寧なナデもしくはミガキ調整を施した後に暗文を描くことが基本である（第四図1・7・15・16）。福岡平野の高坏は有田式土器の段階に、坏部上半の反転が目立たず直線的にのびることを特徴とする。極端な例では、有田式土器古相段階の門田遺跡辻田地区八号住居跡出土の高坏のように、坏部下半から口縁部までほぼ直線的にひろがるものがある。甘木・朝倉地区の高坏は、小田道遺跡の例が示すように、坏部上半の反転が強調され坏部が深いものが基本である（第四図10・11・19・20）。

甕は糸島平野で出土するもの（第二図1・6・11・23）と福岡・早良平野で出土するもの（第二図2・7・12・24）を比較すると、前者が後者にくらべ口径または胴部最大径が器高に対して小さく、細身でスマートな印象を与える。また、出土量が少ないが、福岡平野でも那珂川中・上流域では、「く」字形口縁部が中程でさらに外折する甕が西新町式土器古相段階から柏田式土器古相段階にみられる（第二図3・13・36）。地理的に筑後地方に近い甘木・朝倉地区の甕は、胴部が非常に長く筑後地方系統の甕に近似する（第二図8・14・25）。

壷は、糸島平野から早良平野北西部の遺跡では、複合口縁壷とともに口頸部が朝顔形にひらき口縁部内面に粘土帯を貼付する広口壷がみられる。これに対して早良平野と福岡平野では、後者の口縁部内面に粘土帯を貼付するかわりに複合口縁部をつけた広口壷が多い。甘木・朝倉地区では前述の広口壷は少なく、複合口縁壷は頸部が短く、第三図

5・14・26・58の系譜をひく壷が盛行する。

このように、筑前地方内の小平野単位の在地系統土器の地域色を抽出できるが、それは旧国単位での土器の地域色の発現形態と異なり形状あるいは調整手法の「くせ」、つまり部分要素の差違という発現形態をとる。

二　外来系統土器の流入過程

本節では、外来系統土器がどういう過程で筑前地方に流入するかを考えてみたい。その流入過程を具体的にあらわす方法としては幾つかの方法が考えられるが、本稿では一遺跡あるいは一遺構から出土する土器を系統別・器種別に分けて、その個体数の構成比率をとり、遺跡・遺構ごとに比較検討するという方法をとる。また比較検討する遺跡・遺構としては、柳田康雄氏が墓地および墓地に伴う祭祀遺構出土土器について概要を述べているので、住居跡・溝など集落・生産地関係の遺跡・遺構にしぼりたい。[37] また、遺構によっては一遺構から一・二片の土器片しか出土しない例があると思うと、極端な例では一遺構から四百個体以上の土器が出土する例もある。こうした出土土器の個体数差に著しい差のある資料を一括して比較検討するには問題があり、出土土器の個体数の面から比較対象資料に制限をつける必要がある。本稿では構成比率を十パーセント前後の単位で比較しようと考えるので、五個体以上の土器を出土した遺構を比較の対象とした。最後に、土器の個体数の算出方法であるが、甕・壷・鉢などでは口縁部破片数が最も本来の個体数に近い数値と考え、各系統・器種ごとに口縁部の破片数を個体数とした。ただし、口縁部が出土していないが、明らかに別個体と考えられる胴部あるいは底部破片がある場合には、その破片も一個体として計算した。高坏・器台では、口縁部・脚柱部・脚裾部の各々の破片数をかぞえ、そのうち最も多い破片数を個体数とした。こうした算出方法をとることで、本来の個体数に近い数値をはじきだせたものと思う。

(A)早良平野

早良平野は糸島平野と福岡平野に挾まれた小平野であり、西新町遺跡・藤崎遺跡に代表される海岸部の遺跡と有田遺跡・宮の前遺跡・原深町遺跡などの内陸部の遺跡に大別される。

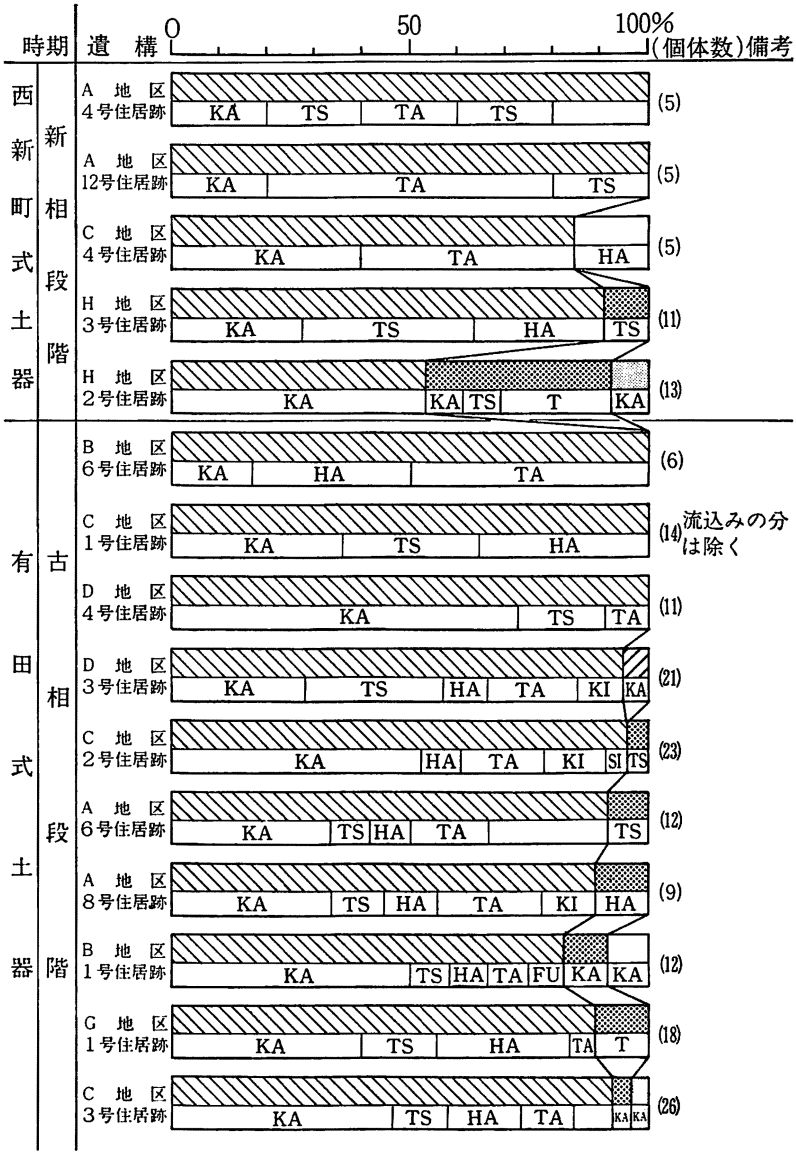
(i)西新町遺跡・藤崎遺跡（第二～四表参照）[38]

両遺跡は早良平野の東北部の博多湾に面した古砂丘上に立地し、早良平野の玄関口ともいうべき位置にある。玄界灘沿岸に形成された他の砂丘遺跡と同様に、縄文時代晩期末以降墓地が営まれている。藤崎遺跡では住居が営まれだすのは西新町式土器古相段階以降であり、発掘された古墳時代初頭前後の住居は五軒のみである。これに対して、該期の墓地としての利用は頻繁であり、古くから箱式石棺・甕棺が発見され、明治四十五年には箱式石棺から仿製の三角縁二神龍虎鏡と鉄刀が、大正六年にも箱式石棺から方格渦文鏡が出土し、昭和五十五年度の調査では十基の方形周溝墓が発見された。西新町遺跡では一九七六～七八年度の調査で、西新町式土器新相段階～柏田式土器古相段階の住居跡五十七軒、甕棺墓一基が検出された。藤崎遺跡とくらべ、該期の住居跡数が多く、埋葬遺構が極端に少ないことが注目される。両遺跡は約二百メートルほどしか離れておらず、近接する遺跡もないことから、古墳時代初頭前後には墓地としての藤崎遺跡・集落としての西新町遺跡という性格付けが可能であり、墓地と集落という機能をわかつ遺跡群と考えられる。

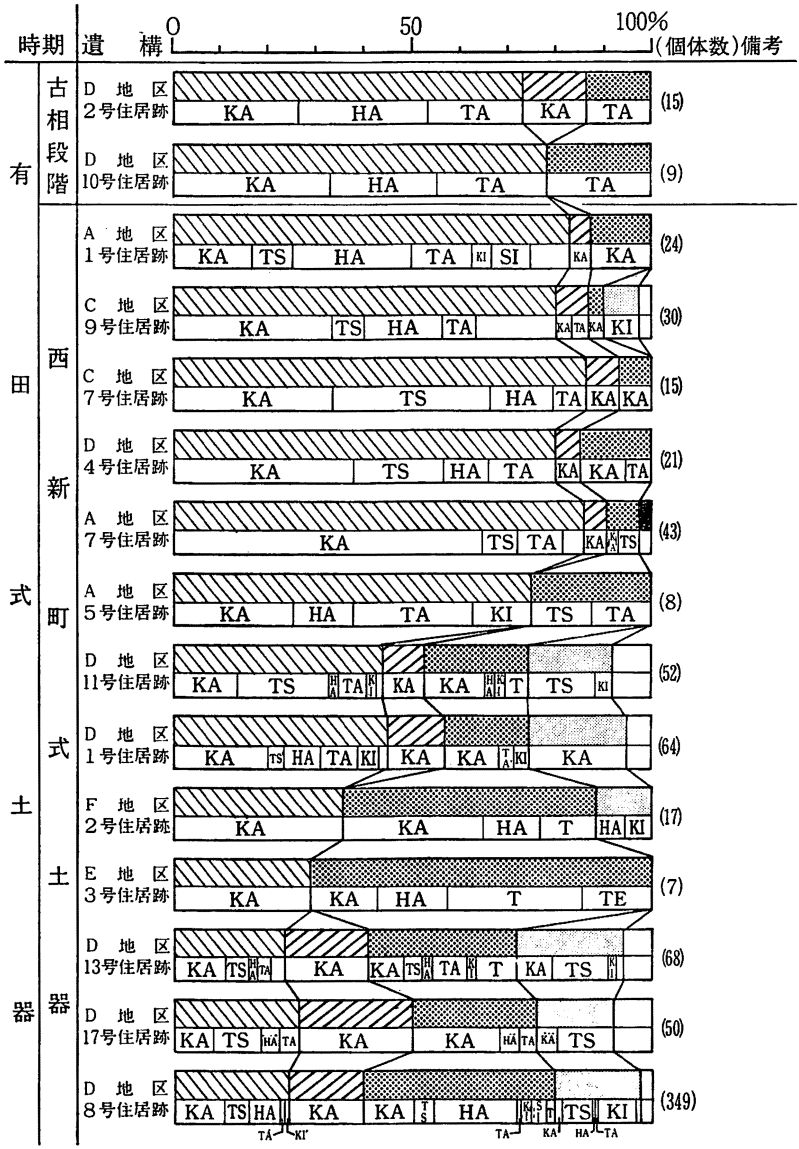
ここで、西新町遺跡の各住居跡ごとに出土土器の系統別構成比率をあらわしたのが第二～四表である。ほとんどは廃棄された土器であるが[39]、次のように出土土器の構成比率から住居跡を分類できる。

a類住居跡―出土土器のすべてが在地系統土器によって占められる。

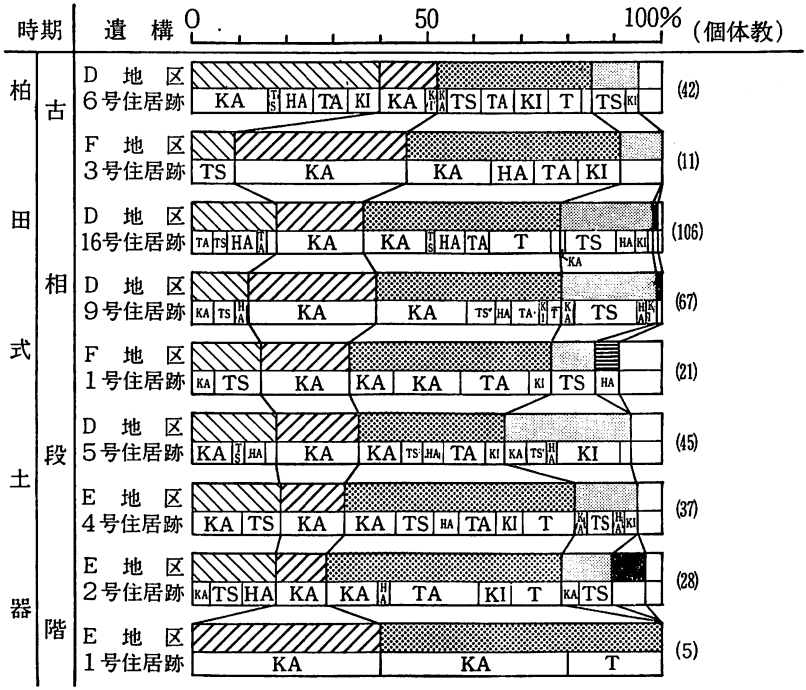
b類住居跡―出土土器のうち九割前後が在地系統土器で、一割前後が近畿地方あるいは中国中部地方系統といった外来系統土器によって占められる。



第2表　西新町遺跡出土土器の系統別・器種別構成比率表①



第3表　西新町遺跡出土土器の系統別・器種別構成比率表②



第４表　西新町遺跡出土土器の系統別・器種別構成比率表③

（表註）第２～11表は以下に準ずる。

▧ 在地系統土器　▨ 外来系統土器と在地系統土器の折衷形の土器

▒ 近畿地方系統土器　▩ 中国中部地方系統土器　▤ 山陽東部地方系統土器

■ 朝鮮半島の陶質土器　□ 系統不明の土器

KA 甕　TS 壺　HA 鉢　TA 高杯　KI 器台　SI 支脚

KO 甑　FU 蓋　TE 手あぶり形土器　T 飯蛸壺

空欄は器種不明の土器

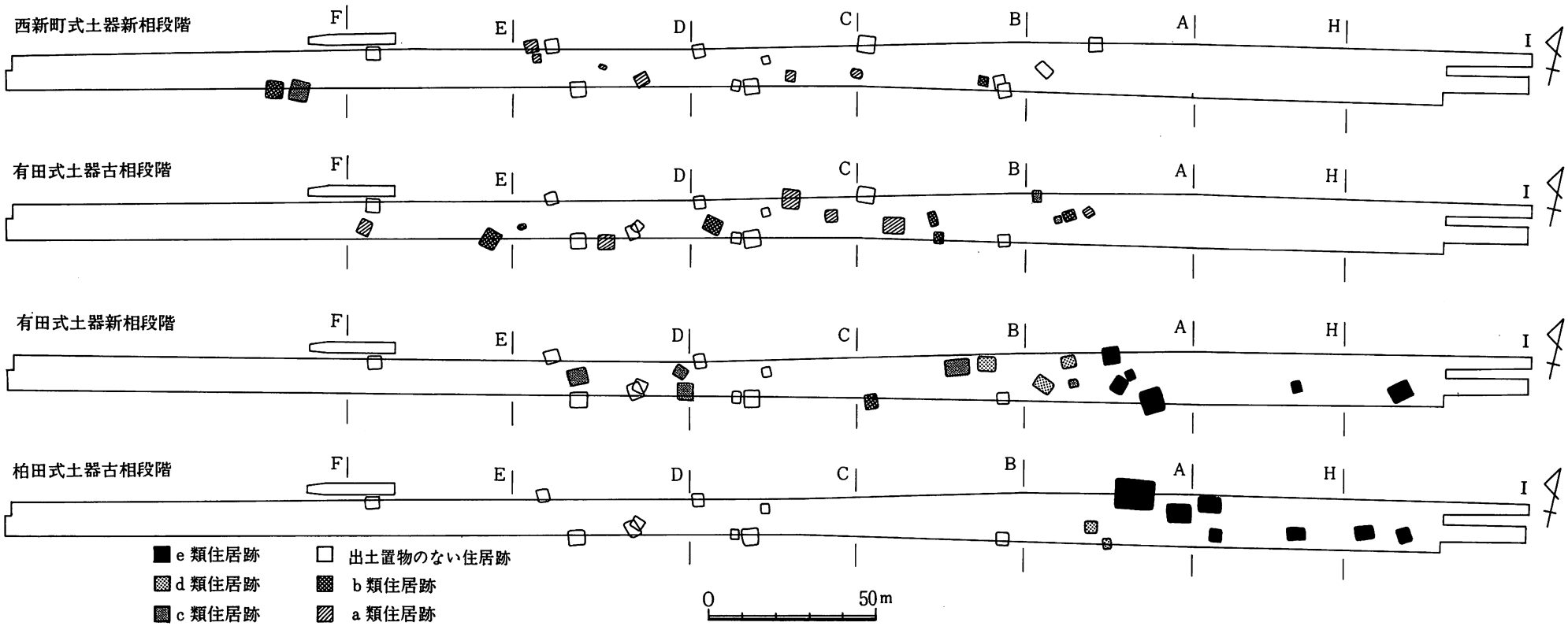
c類住居跡―出土土器のうち七～八割が在地系統土器、二～三割が外来系統土器によって占められる。

d類住居跡―出土土器のうち在地系統土器が五割前後、他は外来系統土器で占められる（近畿地方系統土器・中国中部地方系統土器が各二割前後、近畿地方系統土器と在地系統土器との折衷形の土器が一割以内を占める例のほかに、近畿地方系統土器が外来系統土器のなかで圧倒的に多い例がある）。

e類住居跡―出土土器のうち在地系統土器が二～三割、近畿地方系統土器が三～四割、中国中部地方系統土器が二割前後、近畿地方系統土器と在地系統土器との折衷形の土器が二割前後を占める。

さらに、a～c類住居跡では外来系統土器は一～二器種、d類住居跡では多くても四器種程度であるが、e類住居跡では外来系統土器のうち近畿地方系統土器と中国中部地方系統土器についてのみ、甕・壺・鉢・高坏・器台など各器種がワン・セットとして出土する例がみられる。また、近畿地方系統土器と在地系統土器との折衷形の土器は器種的には甕が圧倒的に多い。第二～四表からいうと全体としては、次第に外来系統土器が増加する傾向にあり、その結果d・e類住居跡が増加することとなる。次に、各時期ごとにa～e類住居跡がどのように集落を構成するかを示したのが第五図である。

西新町遺跡では五十七軒のうち四十五軒の住居跡は出土土器から時期比定が可能であり、西新町式土器新相段階には七軒、有田式土器古相段階には十四軒、同新相段階には十五軒、柏田式土器新相段階には九軒を数える。残り十二軒の住居跡は出土遺物がなく時期比定は難しいが、いずれも西新町式土器新相段階～柏田式土器古相段階のものと考え、第五図には各時期ごとに時期不明住居跡としてかきこんでいる。まず、西新町式土器新相段階をみると、集落はa・b・c類住居跡から構成されるが、a類住居跡は集落の中心に、b・c類住居跡は縁辺に配される傾向がうかがえる。[40] 遺跡全体としては外来系統土器は少なく、器種的にも甕・壺・（鉢）・飯蛸壺ぐらいである。有田式土器古相段階も集落はa・b・c類住居跡で構成されるが、前段階とくらべb・c類住居跡が急増し、遺跡全体としても外



第5図　西新町遺跡の集落変遷図

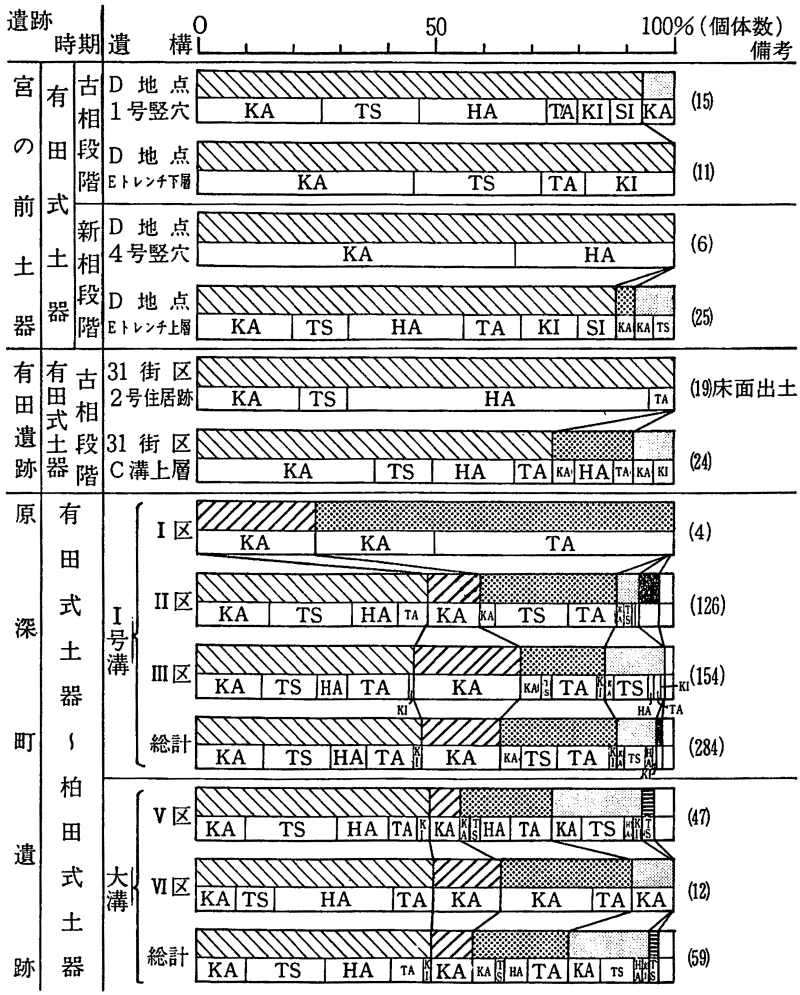
来系統土器が大幅に増えて、器種的には高坏が加わる。該期の集落はC地区東半部を境いとする二つの住居跡群に分けることができそうで、東側グループではc類住居跡を中心に大小の住居跡が密集する景観を呈し、西側グループや前段階の集落景観とは趣きを異にする。また、この集落に対応する墓地が営まれた藤崎遺跡では方形周溝墓（一九八二年調査八号方形周溝墓）がはじめてあらわれて、この段階は集落・墓地の双方で大きな画期である。有田式土器新相段階にはa類住居跡は姿を消し、b・c類住居跡に加えてd類住居跡によって集落が構成される。遺跡全体としても外来系統土器は前段階にひきつづき増加し、器種的にも甕・壷・鉢・高坏・器台・手あぶり形土器・飯蛸壷などが揃う。また、精製の鉢・高坏・器台・手あぶり形土器など祭祀的色彩の強い器種がみられる。住居跡群はC地区西半部を境いに東西の二つのグループに分離でき、西側グループとくらべ東側グループに外来系統土器がかたよって出土する。集落景観からは、東側グループは前段階より住居跡数が増加して密集する傾向を認める。西側グループも時期比定のできなかった住居跡を考慮すれば、同様な集落景観を呈するものと考える。藤崎遺跡では二・四・六号方形周溝墓が営まれ、六号方形周溝墓からは舶載の三角縁二神二車馬鏡・鉄製素環頭大刀・鉄鏃・鉄刀子・鉄鉋が出土している。最後に、柏田式土器古相段階には集落はd・e類住居跡だけで構成され、器種的にすべてが揃うのは在地系統土器ではなく外来系統土器―特に近畿地方系統土器―である。有田式土器新相段階までは外来系統土器は出土量がいくら多くても、それはあくまでも客体であるが、この段階に外来系統土器が在地系統土器を量的にも質的にも凌駕する。また、時期比定の可能な住居跡は遺跡の東半部にのみみられ、密集すると同時に住居跡の長軸方向がほぼ東西を向き、住居の配列に一定の規則性が認められる。現在このような集落景観を呈する集落は筑前地方では類例がない。

さて、西新町遺跡が営まれた古砂丘の背後は沖積平野の氾濫原であり[41]、水田経営には不向きの土地であることから、集落の主要な経済基盤を水田経営には求めることはできない。それは、この古砂丘が縄文時代晩期末以来、長い間墓地にしか利用されない非生産的な場所であったことからもうなずける。そこで、立地の上から集落の経済的基盤

は海と結びつけて考えざるをえない。さらに、大阪湾沿岸を中心として分布する飯蛸壷の出土[42]・近畿地方系統土器・中国中部地方系統土器・山陽東部地方系統土器・朝鮮半島の陶質土器など外来の各系統の土器が大量にかつ恒常的にみられることから、漁撈活動を媒体とする広範な海上交流が存在したと考えられる。この交流には人間の往来と同時に物品の交易も含まれていたと考えられ、西新町遺跡の集落の経済的基盤は漁撈活動と海上交易活動と考える。筑前地方には西新町遺跡のほかに、海岸部に営まれ各種の外来系統土器を多く出土して漁撈活動とともに海上交易活動を行ったと考えられる遺跡には、糸島平野の入口にあたる位置を占める福岡市今山下遺跡、粕屋郡今川遺跡などがある[43]。

(ii)有田遺跡・宮の前遺跡（第五表参照[44]）

早良平野の内陸部では住居跡の検出例は少なく、有田遺跡と宮の前遺跡が知られている程度である。有田遺跡では公表された例で十七街区住居跡と三十一街区二号住居跡が比較資料となりえる。両者とも有田式土器新相段階に比定され、十七街区住居跡では在地系統土器が七十五パーセント、近畿地方系統土器が十五パーセント、中国中部地方系統土器が八パーセントを占める。西新町遺跡で分類したc類住居跡に相当し、近畿地方系統の高坏と小形丸底壷が含まれる点は注意される。三十一街区二号住居跡では床面あるいは住居跡に伴うと考えられる小ピット内から土器が出土している。出土土器はすべて在地系統土器であり、西新町遺跡でこの段階に、出土土器のすべてが在地系統土器であるa類住居跡がみられないこととは対蹠的である。宮の前遺跡では西新町式土器古相段階～有田式土器新相段階の十七～十八軒の住居跡と考えられる竪穴遺構が検出されている。出土遺物が少ないために、各竪穴遺構の時期の比定はむずかしいが、一時期五軒前後の竪穴遺構が営まれたと考えられる。住居跡からはほとんど外来系統土器は出土しておらず、D地点一号竪穴遺構で外来系統土器が一例出土している程度である。こうした外来系統土器が少ないことは、遺跡全体でもいえることで、E地点の包含層でも上層出土資料中に十五パーセント前後外来系統土器が含まれている程度である。このように、同じ早良平野でも内陸部の集落では、海岸部の集落とくらべ外来系統土器の流入は少



第5表　宮の前・有田・原深町遺跡出土土器の系統別・器種別構成比率表

ない。また、出土量の少ない外来系統土器の中で、甕以外に近畿地方系統の小形丸底壺・二重口縁壺・高坏、中国中部地方系統の鼓形器台など祭祀的性格の強い器種が一定量含まれていることは注目される。

(iii) 鶴町遺跡・原深町遺跡・湯納遺跡（第五表参照）[45]

これらの遺跡は早良平野内陸部のほぼ中央に位置し、古墳時代初頭前後の溝あるいは旧河道が検出されている。鶴町遺跡では第Ⅱ号溝がそれにあたり、柵状遺構・樋・堰あるいは護岸の堤防と考えられる木組み遺構などが発見され、水田経営に対する施設と考えられている。木組み遺構を堰とすれば、構造的には愛媛県松山市古照遺跡[46]で発見された堰に最も近いことが指摘されている。時期比定については、第Ⅱ号溝が旧河道であるために確定できないが、出土土器から西新町式土器新相段階～有田式土器新相段階と考える。土器の出土量は極めて少なく、ほとんどが在地系統土器であり、外来系統土器は全体の一割以下である。原深町遺跡では第一～七号溝・旧河道と考えられる大溝と、これらの溝に伴う二つの堰が発見されている。第二号堰により大溝の水位をあげ第二・五号溝に分水するという灌漑用水施設が考えられている。出土遺物には夜臼式土器～中世の土師器・磁器まであるが、出土量は有田式土器古相段階～柏田式土器新相段階のものが最も多く、弥生土器が護岸用杭の打込まれた土層中から出土していることから、本遺跡の灌漑用水施設の時期は有田式土器古相段階～柏田式土器新相段階と考える。鶴町遺跡とくらべ、土器の出土量は非常に多く、在地系統の精製の小形壺、近畿地方系統の小形丸底壺・精製の小形鉢・高坏・器台、中国中部地方系統の鼓形器台など祭祀的性格をもつ器種が目立つ。系統別構成比は第一号溝の場合、Ⅰ区出土土器は四個体と極端に少なく比較材料とはならないが、Ⅱ区とⅢ区では在地系統土器が約五割、近畿地方系統土器と在地系統土器との折衷形の土器が一～二割、近畿地方系統土器が二～三割、中国中部地方系統土器が一～二割を占め、さらに朝鮮半島の陶質土器が数点出土している。大溝出土土器でもほぼ同様な構成比を示す。また、大溝出土土器では有田式土器新相段階～柏田式土器古相段階のものが、一号溝出土土器では柏田式土器古相段階～同新相段階のものが主体を占める。両者を

比較すると在地系統土器と近畿地方系統土器の比率はほぼ同程度であるが、前者は後者にくらべ近畿地方系統土器と在地系統土器との折衷形の比率が高くなるのに対して、中国中部地方系統土器の比率は低くなる。各系統ごとに甕・壷・高坏・器台などワン・セットの器種が揃う。湯納遺跡ではⅡ―A区D―5溝上層から有田式土器新相段階～柏田式土器新相段階の土器がかたまって出土した。土器の一点一点にあたっていないが、報告書によれば甕では近畿地方系統土器と在地系統土器との折衷形の土器が非常に多く、近畿地方系統の小形丸底壷・精製の小形鉢・器台など祭祀的性格をもつ器種が量的に目立つことは、原深町遺跡と同様である。

早良平野では弥生時代前期以降、有田遺跡などの沖積平野の微高地に営まれた遺跡を核として農耕地の開発が進められていったと考えられるが、堰などの施設をそなえた本格的な灌漑用水施設が確立されたのは有田式土器古相段階～柏田式土器新相段階と考えられている。こうした灌漑用水施設が整備された溝あるいは旧河道では、有田式土器古相段階の鶴町遺跡をのぞき有田遺跡・宮の前遺跡の住居跡とくらべ、外来系統土器の占める割合が非常に大きい。また、祭祀的性格をもった外来系統土器が目立つことから、これらの土器の多くが集落の廃棄物としても、一部は水に対する祭祀に用いられたものと考えられる。有田式土器新相段階～柏田式土器古相段階に水に対する外来系譜の祭祀が盛行すると考える。

(B)福岡平野

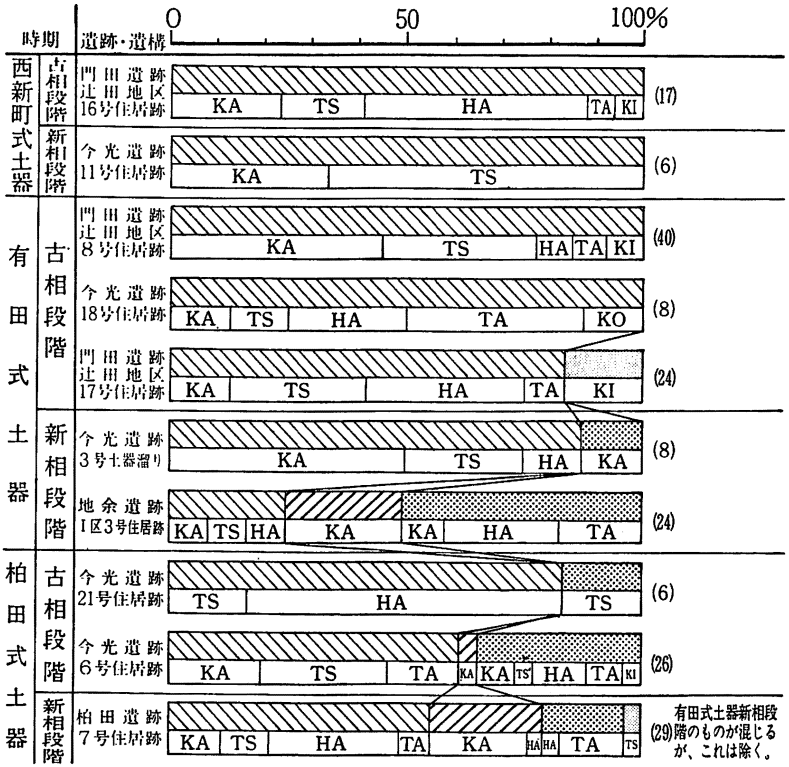
福岡平野の古墳時代初頭前後の遺跡の調査例は内陸部に集中し、住居跡の検出例は多いが、まとまった資料はなく、早良平野の原深町遺跡・鶴町遺跡のような灌漑用水施設の検出例も少ない。

(i)那珂川上流右岸の遺跡群（第六表参照[47]）

那珂川上流右岸に〇・五～一キロメートルと近接して営まれた門田遺跡、柏田遺跡、下原遺跡、今光・地余遺跡、

中原遺跡、宗石遺跡、松ノ木遺跡では該期の住居跡群が多数検出されている。中原、宗石、松ノ木遺跡は概報が出された段階で詳細は明らかでないが、中原遺跡で二軒、宗石遺跡で五軒、松ノ木遺跡で七軒の該期の住居跡が検出されている。門田遺跡辻田地区では、西新町式土器古相段階の住居跡が四軒、同新相段階から有田式新相段階の住居跡が各一軒ずつ、出土遺物が少ないため時期比定の困難な該期の住居跡が四～五軒検出されている。集落は未調査の東北方向にのびる丘陵頂部平坦面にもひろがるものと考えられるが、調査範囲が丘陵の三～四割に及ぶことから、一時期に営まれた住居跡は十軒以内と考えられる。柏田遺跡は有田式土器古相段階～柏田式土器新相段階の集落であり、「二つの小河川に挾まれた、狭長な自然堤防上が当時の生活面」で、集落の規模も十軒以内の小規模なものと考えられている。今光遺跡と地余遺跡は該期の一つの集落の南半部と東北隅にあたり、西新町式土器古相段階～柏田式土器新相段階の住居跡が二十三軒前後検出された。未調査の部分を含めても、一時期五～十軒の住居跡群から構成される集落と考える。また、各集落では有田式土器新相段階以降の西新町遺跡でみられた住居跡が密集するようなことはなく、集落景観は宮の前遺跡・西新町式土器古相段階の西新町遺跡の集落と共通する。

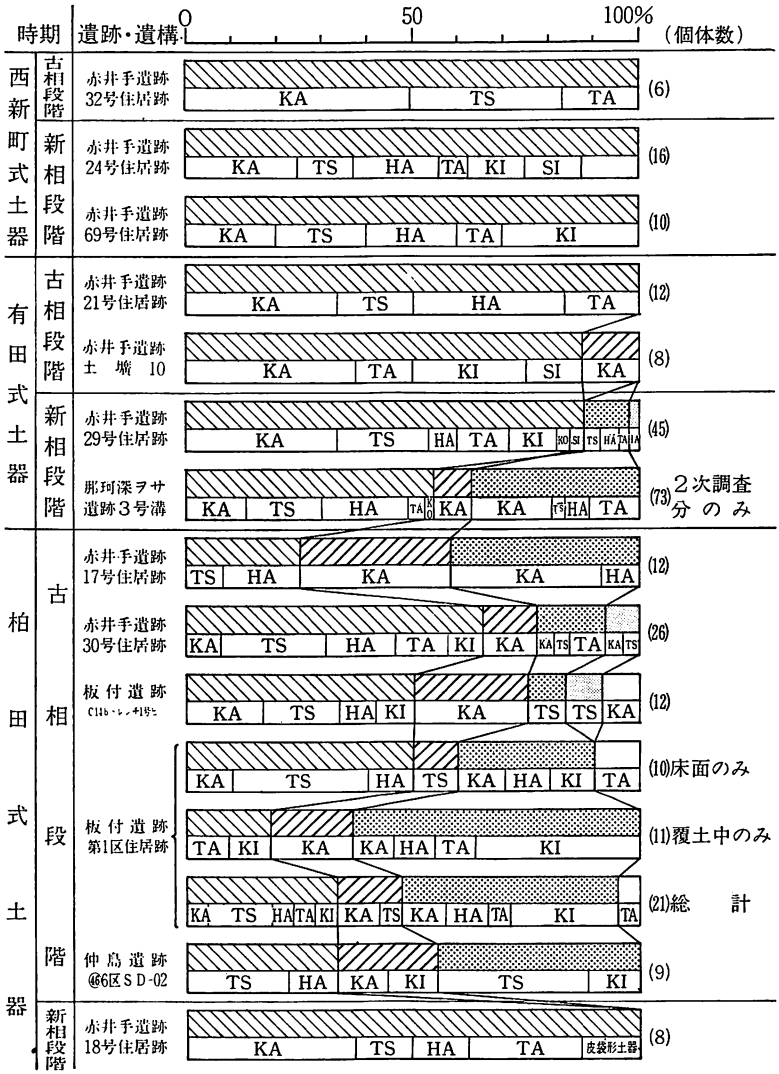
系統別の土器の出土をみると、西新町式土器の段階の住居跡は、いずれも全出土土器が在地系統土器である住居跡である。有田式土器古相段階にも、出土土器がすべて在地系統土器である住居跡が多く、わずかに門田遺跡辻田地区十七号住居跡のように中国中部地方系統の鼓形器台が全体の一割以上を占める例、柏田遺跡八号住居跡のように破片数ではあるが近畿地方系統の甕が全体の一～二割を占める例があらわれる。しかし、集落全体でみると外来系統土器の出土量は未だ少ない。有田式土器新相段階も同様である。次に、柏田式土器古相段階には、今光遺跡六号住居跡・柏田遺跡七号住居跡のように全体の四割前後を外来系統土器が占める例、地余遺跡Ⅰ区三号・五号住居跡のように全体の七割以上を外来系統土器が占める例がみられる。しかし、今光遺跡二十一号住居跡・柏田遺跡二号方形竪穴状遺構では外来系統土器は全体の一～二割程度しか占めず、すべての住居跡で一律に外来系統土器の比率が高くなるわけで



第6表　福岡平野の主要遺跡出土土器の系統別・器種別構成比率表①

はない。また、外来系統土器はほとんどが近畿地方系統土器と、近畿地方系統土器と在地系統土器との折衷形の土器であるが、外来系統土器が五割をこえる住居跡でも、西新町遺跡のe類住居跡のように外来系統土器が質的に在地系統土器を凌駕することはほとんどなく、あくまでも客体的存在である。また、このような那珂川上流右岸の集落でみられる外来系統土器の流入過程の様相は福岡平野内陸部の他の集落でも同様である（第七表参照）[48]。

以上のように、福岡平野内陸部の集落では、外来系統土器が本格的にみられるようになるのは有田式土器古相段階以後であり、柏田式土器古相段階に急増する。西新



第7表　福岡平野の主要遺跡出土土器の系統別・器種別構成比率表②

町遺跡でも有田式土器古相段階にb・c類住居跡が急増することから、一致した外来系統土器の流入過程の画期を設定できる。また、門田遺跡辻田地区十七号住居跡の外来系統土器がすべて中国中部地方系統の鼓形器台であるほか、祭祀的性格の強い器種が含まれることは、西新町遺跡・宮の前遺跡などの早良平野の集落と共通している。しかし、西新町遺跡と比較して外来系統土器の集落への流入量は少なく、外来系統土器を出土する住居跡も集落内で量的に限られている。さらに、柏田式土器新相段階の直後に比定される下原遺跡・門田遺跡辻田地区六号住居跡出土の土器群中には、外来系統土器はほとんどみられず、外来系統土器の流入のピークは柏田式土器の段階と考えられる。

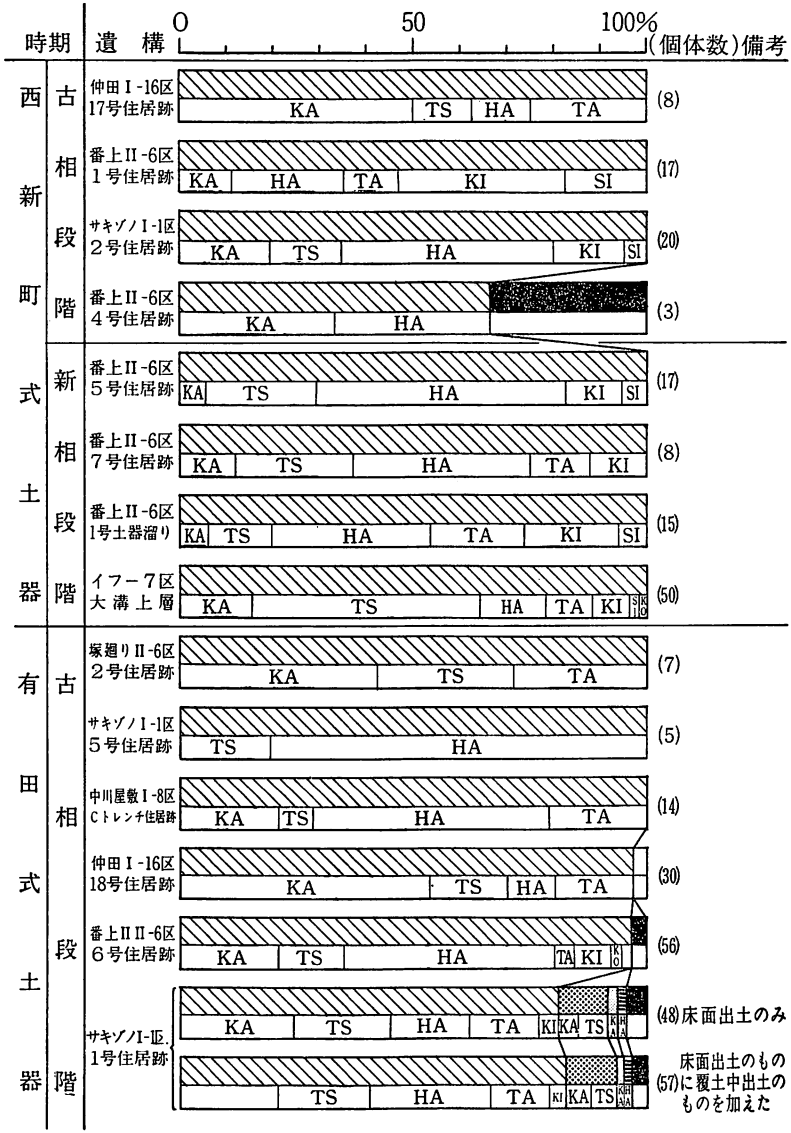
(ii)五十川野間遺跡・那珂深ヲサ遺跡[49]

五十川野間遺跡の大溝Iは旧河川で、出土土器は一部須恵器が混じるが、ほとんどは有田式土器の段階のものである。多くは細片化しているため正確な個体数をわりだすことはできないが、外来系統土器が全体の一～二割程度を占める。那珂深ヲサ遺跡では、有田式土器～柏田式土器の段階の第三号溝と、それに伴う柵状遺構など水利施設あるいは水田跡が検出されている。水利施設に伴う土器は、第二次調査分で約五割が外来系統土器で占められ、早良平野の原深町遺跡などと同様な出土土器の系統別構成比がえられている。また、両遺跡ともに外来系統土器に祭祀的性格をもつ器種が多いことは、早良平野の原深町遺跡・湯納遺跡と同様である。

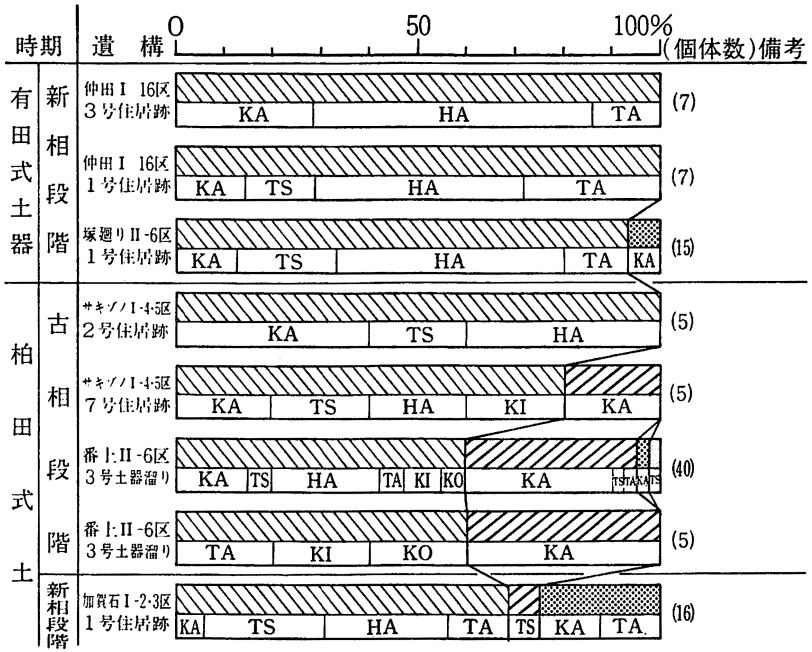
(C)糸島平野

糸島平野の古墳時代初頭前後の主要遺跡には、海岸部の今山下遺跡と内陸部の三雲遺跡をあげることができる。前者についてはすでにふれたので、ここでは三雲遺跡について検討する。[50]

三雲遺跡は一九七四年から圃場整備事業にともない発掘調査が開始された。古墳時代初頭前後の遺構は瑞梅寺川と川原川に挟まれた微高地上に集中して検出され、微高地中央の加賀石・仲田・番上・サキゾノ・塚廻り・中川屋敷地



第８表　三雲遺跡出土土器の系統別・器種別構成比率表①



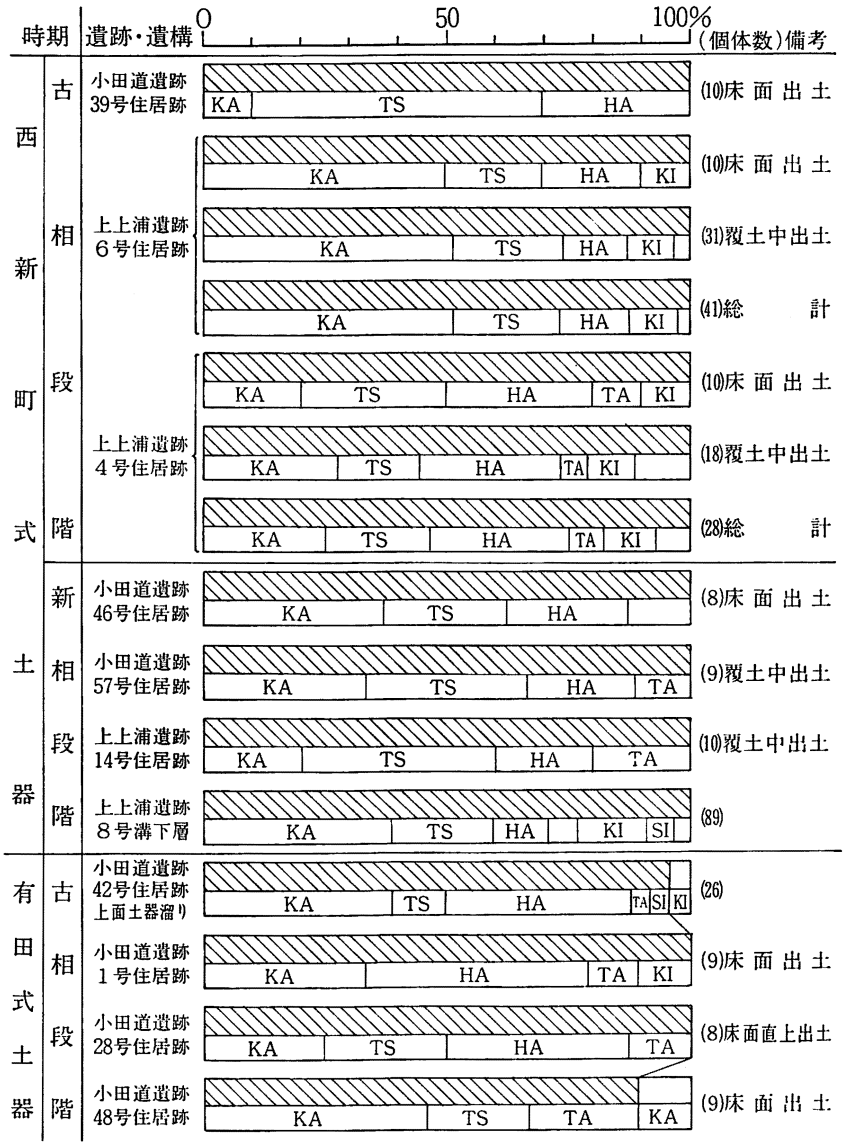
第９表　三雲遺跡出土土器の系統別・器種別構成比率表②

区では住居跡群が、微高地の東側縁辺では墓地が営まれている。住居跡が最も集中するのは仲田Ⅰ―16区・番上Ⅱ―6区・サキゾノⅠ―1区である。集落の全体像を明らかにしえないが、トレンチ内の住居跡の密度は高く、有田式土器新相段階の西新町遺跡に近く、遺跡のひろがりから考えると相当大規模な集落と考える。各住居跡出土の土器の一部しか実見していないが、報告書の任意抽出資料を用いて、第八・九表を作成し参考資料とした。西新町式土器古相段階～有田式土器新相段階には、出土土器のすべてが在地系統土器である住居跡が圧倒的に多い。その中で、外来系統土器が恒常的にみられはじめるのは有田式土器古相段階である。番上Ⅱ―6区六号住居跡では陶質土器が三パーセントを占め、サキゾノⅠ―1区一号住居跡では近畿地方系統土器が十パーセント・中国中部地方系統土器と山陽東部地方系統土器が各二パーセント・陶

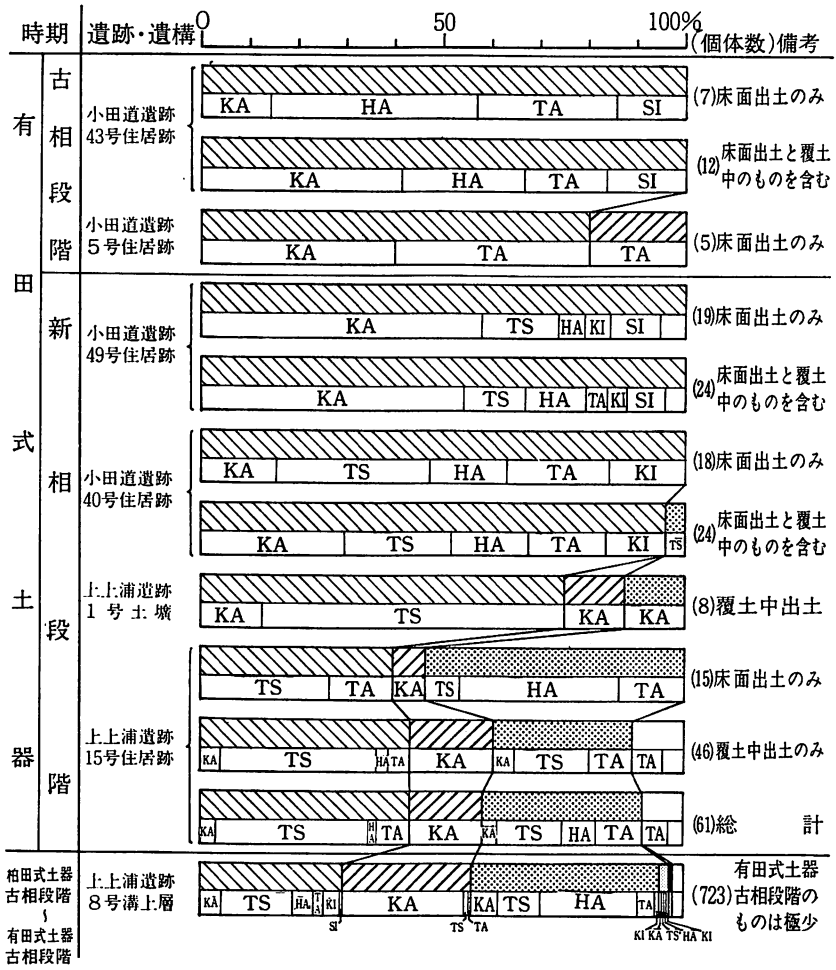
質土器が四パーセントを占める。また、外来系統土器が比較的大きな割合を占めるサキゾノI―1区一号住居跡は、手捏ね土器・土製勾玉・赤色顔料が出土し「祭祀的な住居遺構」と考えられている。柏田式土器古相段階になると福岡平野の遺跡と同じく、外来系統土器が急増し、番上II―6区二号土器溜りでは外来系統土器が全体の三～四割を占める。しかし、遺跡全体としては、外来系統土器の出土量は西新町遺跡のように多くはない。また、外来系統土器には近畿地方系統土器・近畿地方系統土器と在地系統土器の折衷形の土器・中国中部地方系統土器・陶質土器などがあるが、前二者が圧倒的に多い。

(D)甘木・朝倉地区（第八・九表参照）

甘木・朝倉地区の古墳時代初頭前後の遺跡としては甘木市小田道遺跡と上上浦遺跡をあげることができる。[51] 小田道遺跡では西新町式土器古相段階～有田式土器新相段階の住居跡が調査されている。調査範囲内では一時期十軒前後の住居跡が営まれている。上上浦遺跡では西新町式古相段階の住居跡が二軒、有田式土器新相段階～柏田式古相段階の住居跡が四軒、その他古墳時代初頭前後の溝が五条検出されている。これらの住居跡出土の土器をみると、西新町式土器の段階には外来系統土器はみられず、集落は出土土器のすべてが在地系統土器である住居跡で構成される。有田式土器古相段階も在地系統土器が圧倒的に多く、小田道遺跡五号住居跡で近畿地方系統の高坏と在地系統の高坏との折衷形の土器と考えられるものが出土しているが、福岡平野・糸島平野の集落とくらべ外来系統土器の流入はさらに少ない。有田式土器新相段階になると、甘木・朝倉地区の集落でも糸島・早良・福岡平野の集落と同様に外来系統土器の出土例量急に増加する。また、糸島・福岡平野の内陸部の集落と同様に、外来系統土器には近畿地方系統土器、近畿地方系統土器と在地系統土器との折衷形の土器が圧倒的に多い。しかし、集落単位で比較すると、小田道遺跡と上上浦遺跡は一・五キロメートルと近接して営まれているが、前者では外来系統土器が遺跡全体で数点しか出土して



第10表　小田道遺跡・上上浦遺跡出土土器の系統別・器種別構成比率表①



第11表　小田道・上上浦遺跡出土土器の系統別・器種別構成比率表②

いないのに対して、後者では十五号住居跡例のようにかなりの量の外来系統土器が出土している。また、上上浦遺跡の八号溝に廃棄された大量の土器群には外来系統土器が全体の七割近く含まれ、特に近畿地方系統の精製の小形鉢・器台・高坏など祭祀的な性格をもつ器種が多く、しかも陶質土器・土製勾玉・土製模造鏡・手捏ね土器が出土していることから、これらの遺物群は「単なる投棄ではなく背景に水神信仰の痕跡」が考えられている。

三　古墳時代初頭前後の筑前地方

古墳時代初頭前後の筑前地方における土器編年を示し、在地系統土器の小平野単位ごとにみられる地域色を抽出し、遺跡・遺構ごとの出土土器の系統別個体数比からみた外来系統土器の流入過程をみてきた。こうしてみると、土器はそれ自体の形状変化の中でではなく、遺構との関りあいの中で該期の社会を雄弁に物語っているようである。

まず、外来系統土器が本格的に流入する前段階の情況を考えたい。在地系統土器には、前述したように小平野単位ごとの地域色がみられる。糸島平野の土器が福岡平野で、福岡平野の土器が甘木・朝倉地区で出土する例が知られ、筑前地方内での小平野単位をこえた土器の搬出・搬入がみられる。しかし、搬出・搬入された土器の数は非常に少ない。たとえば、甘木・朝倉地区の上上浦遺跡八号溝では福岡平野でも那珂川中・上流域に分布する甕が出土しているが、出土数は七百二十三個中二個と非常に少ない。また、三雲遺跡の有田式古相段階の番上Ⅱ－6区六号住居跡、仲田Ⅰ－6区一号住居跡、サキゾノⅠ－1区一号住居跡で、坏部内面にハケメ調整を施した後に暗文を描く高坏が少量出土している。この調整手法は早良平野の高坏に基本的にみられる手法であるが、それらの坏部上半ののびは短く、形状的にはあくまでも糸島平野の高坏である。このように、他の小平野の土器の調整手法を借用した土器はあるものの、土器自体が搬出・搬入されることは非常に少ないことから、在地系統土器の交流からみた筑前地方内の小平野は各々ある程度完結していた情況にあったと考えられるのではなかろうか。

次に、住居跡ごとの出土土器の系統別構成比率からみた外来系統土器の流入過程には、各集落ごとに相違が認められる。しかも、それは小平野単位ごとの差違あるいは集落規模から生じる差違よりも、むしろ経済的基盤の異なる海岸部の集落と内陸部の集落という対比関係に、より大きな差違が認められる。

まず、海岸部の集落では、西新町式土器の段階から恒常的に外来系統土器が流入しており、有田式土器古相段階にその量が急増する。西新町遺跡の集落では、全出土土器の一割前後を外来系統土器が占めるb類住居跡・二～三割を外来系統土器が占めるc類住居跡の急増というかたちであらわれる。その後、西新町遺跡の各住居跡ごとの外来系統土器の占める割合は大きくなり、集落の東半部に外来系統土器が大きな割合を占める住居跡が集中・密集するようになる。柏田式土器古相段階には、量的にも質的にも外来系統土器が在地系統土器を凌駕して出土土器の主体となり、住居跡群は密集し、主軸方向が東西方向をむく一定の規則性をもった集落景観がみられる。こうした現象の背景を、本稿では前述したように西新町遺跡・今山下遺跡・今川遺跡などの海岸部の集落の経済的基盤を漁撈活動とともに海上交易活動であると考えた。また、当初外来の各系統土器がみられるが、有田式土器の段階以降、外来系統土器の中でも近畿地方系統土器と中国中部地方系統土器が大きな割合を占めるようになる。しかし、第一節でもふれたように、中国中部地方系統土器の中には近畿地方系統土器の影響をうけたものがみられることから、実質的には外来系統土器の増加は近畿地方系統土器の増加といえる。さらに、これが在地系統土器を量的にも質的にも凌駕することから、西新町遺跡の集落では、その経済的基盤である海上交易活動の主体が有田式土器の段階を契機として、在地の勢力から近畿地方の勢力へ包括されていったと考える。このような情況を背景として、藤崎遺跡で舶載の三角縁二神二車馬鏡などを副葬した方形周溝墓群が成立したのである。

水田経営を経済的基盤とする内陸部の集落では海岸部の集落とは異なり、西新町式土器の段階には、外来系統土器は恒常的には認められず、在地系統土器で全出土土器が占められる住居跡から構成される集落がほとんどである。わず

かに三雲遺跡番上Ⅱ―6区四号住居跡から陶質土器が出土しているにすぎない。古墳時代初頭前後の筑前地方における内陸部の集落は大きく二種に分けられる。一つは福岡平野の那珂川上流右岸あるいは早良平野の宮の前遺跡でみたように、一時期五～十軒の住居跡群から構成される集落であり、他は集落の全体像は明らかではないが、住居跡が密集してかなりの数の住居跡が営なまれたと考えられる三雲遺跡のような大規模集落である。海岸部の西新町遺跡の集落は景観的には後者に近い。このような二種の集落間で外来系統土器の流入は、前述したように三雲遺跡で陶質土器が出土することから若干の差違が認められるが、西新町遺跡でみられるように恒常的に外来系統土器はみられず、それ程大きな差違とはいいがたい。有田式土器古相段階になると、門田遺跡辻田地区十七号住居跡・三雲遺跡サキゾノⅠ―1区一号住居跡・小田道遺跡五号住居跡など外来系統土器が全体の一～二割を占める住居跡があらわれ、この段階以降各集落へ本格的な外来系統土器が流入しはじめる。また、門田遺跡十七号住居跡では外来系統土器のすべてが祭祀的性格をもつ鼓形器台であること、三雲遺跡サキゾノⅠ―1区一号住居跡は出土遺物から「祭祀的な住居遺構」と考えられること、他に外来系統土器の中で近畿地方系統の高坏・精製の小形鉢・器台、中国中部地方系統の鼓形器台などの祭祀的性格をもつ器種が目立つことから、有田式土器古相段階における外来系統土器の流入には祭祀的側面が強調されている。しかし、この段階の各集落を構成する住居跡の多くは出土土器がすべて在地系統土器で占められる住居跡であり、外来系統土器がみられる住居跡は各集落の中で限られ、外来の祭祀的性格をもつ土器の受容は集落内の限られた一部（首長層？）での受容と考えられる。それは外来の祭祀習俗の受容であり、前述した小平野単位ごとに地域色をもつ在地系統土器から考えた小平野ごとに完結した情況をのりこえ、各集落内の一部のグループ（首長層？）が筑前地方外の外来の祭祀権と結びつく過程と考える。つぎに、有田式土器新相段階～柏田式土器古相段階には、内陸部の集落でも外来系統土器の流入はピークをむかえ、住居跡によっては外来系統土器が全体の五～七割を占める例もみられる。しかし、西新町遺跡と比較すると、外来系統土器が出土土器の五割以上を占める住居跡のみで構

成される集落はみられず、多くの住居跡では外来系統土器の占める割合は〇～三割程度である。また、海岸部の集落とくらべ、外来系統土器には近畿地方系統土器と、近畿地方系統土器と在地系統土器の折喪形の土器が圧倒的に多いが、これらが甕・壷・鉢・高坏・器台などワン・セットがそろう住居跡は集落の中で限られており、土器の主体はあくまでも在地系統土器である。このような背景としては、外来系統土器の中で甕が圧倒的に多いことから、煮沸容器として外来系統土器が採用された結果、外来系統土器の流入がピークをむかえるとも考えられる。しかし、柏田式土器古相段階には在地系統の甕にも胴部内面ヘラケズリが採用され、外来系統の甕とくらべ煮沸効率が著しく劣るとは考えられず、積極的な理由とは考えられない。また、原深町遺跡・鶴町遺跡・湯内遺跡・那珂深ヲサ遺跡・上上浦遺跡などで、旧河川あるいは溝が検出されている。集落の場合と同様に、有田式土器新相段階～柏田式土器の段階に、出土土器群には近畿地方系統土器を中心とする外来系統土器が急増するが、集落の場合とは異なり、その比率は一様に五～七割といった高い比率を示す。特に、その中に祭祀的性格をもつ器種が多いことから水に対する祭祀、それも近畿地方を中心とする外来系譜の祭祀の盛行が考えられる。それを内陸部の集落の経済的基盤である水田経営にかかわる溝の開削、水利施設の整備という土木技術が近畿地方の勢力下におかれていく過程と考え、その結果前段階の集落内の限られた一部による外来系統土器の受容が、より低階位の集団レベルでも行われるようになるとも考えられる。しかし、該期の土木技術・それに伴う祭祀の実体はそれほど明らかではなく、今後の検討を要する。

以上のように、古墳時代初頭前後の筑前地方では、外来系統土器の流入過程は遺構・遺跡によって相違が認められるものの、大きくみれば、有田式土器古相段階に大きな画期をむかえる。本稿では、その背景を海岸部の集落では近畿地方の勢力が海上交易権を掌握する過程、内陸部の集落では限られた一部（首長層？）が近畿地方を中心とする外来の祭祀権と結びつく過程と考えた。特に、定型化した前方後円墳の出現をささえた水田経営を経済的基盤とする内陸部の集落の場合は、この画期は土器様式の統一体への帰着としてではなく、祭祀様式の統一体への帰着として意義

付けられる。これは近藤義郎氏が述べる定型化した前方後円墳の成立の「統一的な首長霊祭祀型式の創出」という意義と質的な整合性をもつものと考える。最近、定型化した前方後円墳の出現を庄内式土器でも新しい段階に求める見解が出されている。[52] 庄内式土器でも新しい段階とは本稿の有田式土器古相段階と併行するものと考えられ、筑前地方でも該期に定型化した前方後円墳が出現すると考え、定型化した前方後円墳と筑前地方への外来系統土器の流入過程の画期とは時間的にも整合し、有田式土器古相段階をもって古墳時代の開始と考えたい。しかし、筑前地方では宮の前遺跡C地点一号墳などに代表される在地型の古墳と呼ばれる墳墓と、土器相の変化がどのような関係をもつのかは今後の課題である。

本稿をまとめるにあたり、岡崎敬先生、横山浩一先生、西谷正先生からは種々の御指導・御助言をいただいた。また、赤崎敏男・池崎譲二・伊崎俊秋・石山勲・岩瀬正信・折尾学・木村幾多郎・佐々木隆彦・下條信行・副島邦彦・常松幹雄・中間研志・西健一郎・浜石哲也・飛高憲雄・平川敬治・舟山良一・丸山康晴・柳沢一男・柳田康雄・山口譲二・山崎純男・横山邦継・力武卓治の各氏からは御教示をいただき、資料収集、土器の個体数の算出の折に大変御世話になった。上敷領久氏にはトレースにおいて御世話になった。文末ながら記して感謝の意を表わします。

（一九八二年十二月）

〔註〕

（1）小林行雄　一九三九「弥生式土器聚成図録正編解説」、同　一九五二「古墳時代文化の成因について」『古墳時代の研究』（一九六一）に再録。

（2）近藤義郎　一九六八「前方後円墳の成立と変遷」『考古学研究』15―1、同一九七七「前方後円墳の成立」『考古論集』

（3）近藤義郎　一九六六「古墳とはなにか」『日本の考古学』Ⅳ、また、前者の問題については（石野博信　一九八二「古墳時

代史―古墳の出現―」『季刊考古学』創刊号）などで整理が進められている。

(4) 有田遺跡調査団　一九六六「有田遺跡」

(5) 下條信行・沢皇臣　一九七一「宮の前遺跡〈A～D地点〉」　福岡県労働者住宅生活協同組合

(6) 栗原和彦ほか編　一九七六「今宿バイパス関係文化財調査報告」第四集　福岡県教育委員会

(7) 小池史哲編　一九七七「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第四集　福岡県教育委員会

(8) 井上裕弘編　一九七八「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」第七集　福岡県教育委員会

(9) 佐々木隆彦編　一九八〇「今光遺跡・地余遺跡」　東急不動産株式会社

(10) 佐々木隆彦編　一九八二「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」㈠　福岡県教育委員会

(11) 副島邦弘編　一九八一「小田道遺跡」『甘木市文化財調査報告』第八集　甘木市教育委員会

(12) 柳田康雄編　一九八〇「三雲遺跡Ⅰ」『福岡県文化財調査報告書』第五十八集　福岡県教育委員会

柳田康雄・小池史哲編　一九八一「三雲遺跡Ⅱ」『福岡県文化財調査報告書』第六十集　福岡県教育委員会

柳田康雄・小池史哲編　一九八二「三雲遺跡Ⅲ」『福岡県文化財調査報告書』第六十三集　福岡県教育委員会

(13) 小田富士雄　一九六八「有田遺跡の土師器とその性格」『有田遺跡』　有田遺跡調査団

下條信行　一九七一「土器編年について」『宮の前遺跡』　福岡県労働者住宅生活協同組合

井上裕弘　一九七八「弥生終末～古墳前期の土器群について」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第七集　福岡県教育委員会、同　一九八一「奴国その後」『歴史公論』7―2　雄山閣

武末純一　一九七八「福岡県・早良平野の古式土師器」『古文化談叢』第五集　九州古文化研究会

佐々木隆彦　一九八〇「結語」『今光遺跡・地余遺跡』東急不動産株式会社

柳田康雄　一九八二「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』

常松幹雄　一九八二「北部九州における西新町遺跡の位置」『西新町遺跡』　福岡市教育委員会

(14) 折尾学ほか編　一九八二「西新町遺跡」『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅱ　福岡市教育委員会

(15) 編年図の作成にあたり、表現法統一のために報告書掲載の実測図とは若干の相違がある。御寛恕をこう。

(16) 本来は「筑前地方系統土器」というべきである。

(17) これは近畿地方の庄内式土器・布留式土器などにみられるヘラケズリ調整とは異なり草の茎（？）などを用いて、余分の粘

土をかきとる調整である。

(18) 後藤　直編　一九七六「板付」　福岡市教育委員会

(19) 小田富士雄　一九六八「有田遺跡の土師器とその性格」『有田遺跡』　有田遺跡調査団

(20) 森貞次郎　一九五五「各地域の弥生式土器―北九州―」『日本考古学講座』4、同、一九六六「弥生文化の発展と地域性―九州―」『日本の考古学』Ⅲ

(21) 註（14）文献では本稿の第二型式の甕形土器が含まれる「西新町Ⅱ式土器」を「弥生時代終末をさす様式として従来の『西新式』に充てる」ことが提唱されている。

(22) 註（12）文献

(23) 山崎純男　一九七九「板付遺跡調査概報」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第四十九集、福岡市教育委員会

(24) 丸山康晴編　一九八〇「赤井手遺跡」『春日市文化財調査報告書』第六集、春日市教育委員会

(25) 藤田憲司一九七九「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係『考古学雑誌』六十四―四

米子市教育委員会・米子市遺跡調査団　一九六八「福市遺跡」

青木遺跡調査団　一九七八「鳥取県米子市青木遺跡発掘調査報告」Ⅲ

(26) 杠一義編　一九七九「本川原遺跡」佐賀県教育委員会

(27) 埋蔵文化財技術者交流会　一九七九「第五回研究集会記録」

石野博信・関川尚功　一九七七「纒向」桜井市教育委員会

(28) 藤田憲司　一九七九「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』六十四―四

(29) 安達厚三・木下正史　一九七四「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』六十―二

(30) 註（28）前掲文献

(31) 塩屋勝利・折尾学編　一九七五「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第三十二集　福岡市教育委員会

(32) 舟山良一編　一九八一「仲島遺跡」Ⅱ『大野城市文化財調査報告書』第三集　大野城市教育委員会

(33) 註（29）前掲文献

(34) 註（28）前掲文献

(35) 浜石哲也編　一九八二「藤崎遺跡」『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告』Ⅰ　福岡市教育委員会
浜石哲也編　一九八二「藤崎遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第八十集　福岡市教育委員会
飛高憲雄・力武卓治編　一九八一「原深町遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第七十一集　福岡市教育委員会

(36) 武末純一　一九七八「福岡県・早良平野の古式土師器」『古代文化談叢』第五集、九州古文化研究会

(37) 柳田康雄　一九八二「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』　また本稿では便宜的に「集落」という言葉を「住居家屋の集合体」という意味で用いる。

(38) 註（14）・（35）前掲文献のほかに次の文献を参照した。福岡県　一九二五「藤崎の石棺」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第一輯、中山平次郎　一九一八「古式支那鏡鑑沿革（二）」『考古学雑誌』九―三など。

(39) そうした意味では、住居跡本来の時期を示すわけではないが、土器自体は、それほど時間幅のあるものではないので、以下、他の遺跡も含め住居跡の時期をほぼ示し、系統別個体数比は生活の一端をあらわしているものと考えて検討を行う。

(40) H地区二号住居跡は第二表では飯蛸壷を含めているために近畿地方系統土器の比率が高いが、これを除くと外来系統土器の占める割合は三割前後となり、c類住居跡の範疇に属する。

(41) 九州大学理学部の下山正一氏の御教示をうけた。

(42) 和田晴吾・一九八二「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考』

(43) 今山下遺跡に関しては山崎純男氏の御教示をうけた。氏によれば有田式土器段階には外来系統土器が遺跡全体の約二割を占めるという。今川遺跡については次の文献を参考とした。伊崎俊秋・酒井仁夫　一九八一「今川遺跡」『津屋崎町文化財調査報告書』第四集　津屋崎町教育委員会

(44) 註（4）・（5）前掲文献。また、山崎純男氏・下條信行氏に御教示をいただいた。

(45) 註（6）・（35）前掲文献と、力武卓治編　一九七六「鶴町遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第三十七集　福岡市教育委員会を参考とした。

(46) 工楽善通・黒崎直・森光晴ほか　一九七四「古照遺跡発掘報告書」　松山市教育委員会

(47) 註（7）・（8）・（9）前掲文献のほかに次の文献を参照した。佐々木隆彦編　一九七九「安徳・道善・片縄地区区画整理事業内埋蔵文化財調査概報」『那珂川町文化財調査報告書』第三集　那珂川町教育委員会、井上裕弘編　一九七七『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第三集　福岡県教育委員会

(48) 第七表にのせた赤井手遺跡・板付遺跡・仲島遺跡については、佐々木隆彦・丸山康晴・舟山良一・柳沢一男氏に御教示をいただいた。

(49) 横山邦継・浜石哲也編　一九八一「那珂深ヲサ那跡」Ⅰ『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第七十二集　福岡市教育委員会
飛高憲雄・力武卓治編　一九八二「那珂深ヲサ遺跡」Ⅱ『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第八十二集　福岡市教育委員会
池崎譲二編　一九八二「五十川野間遺跡」

(50) 註（12）前掲文献

(51) 註（10）・（11）前掲文献

(52) 置田雅昭　一九八二「古墳出現期の土器」『えとのす』十九号などがある。